



求是道



★ 第三號

卷貳第

求道第貳卷第參號目次

求道

◎親鸞聖人の家庭

◎信仰或問

佛陀は慈悲の塊也

喜ばれざる事によりて喜ぶ

無限の大悲は事實也

講話

◎内愚外賢

◎海の譬喩

實驗

◎身治して後、心に及ぶ

靈蹟

◎五臺山探勝記

▲巡禮者の書簡

歎咏

◎短歌十首

◎夜

時報

◎降誕會◎卒業期◎求道學舎の昨今◎求道學舎講話題◎第二求道會講話題◎第三求道會講話題

▲上野の半日

毎日曜午前九時

求道學舎講話

水郷森川町一帯地

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂)佛敎俱樂部

毎月最終土曜午後六時

第三求道會

(濱町)日本橋俱樂部

求道

第貳卷 第參號

親鸞聖人の家庭

親鸞聖人の人格や偉大にして吾人思議の境に非ず、聖人行年九十、人壽頗る長し、而して史傳の傳ふるもの洵に少し、吾人屢之を怪みたりき、然れども今にして之を思ふ、嘖々傳ふるの事蹟少くして德馨脈々として遠く聞ゆる所以のもの、益々其人格の絶倫なるを徴するに足れり。而して僅かに傳ふる所、傳繪詞及正統傳あるのみ、吾人嘗て傳繪詞を讀みて其事蹟の靈夢に關し、談話の信仰に關するもの多きに過ぐることを見て、史傳として頗る其體を得ざるのみならず、其事實も皆主觀的感想を基礎とせるものなるを以て、亦史傳としての價値をも疑ひたりき。然れども此の如き疑惑は大なる誤謬に陥りしものなりき、夫れ政治家を評價せむと欲せば治亂興亡の上に徴せざるべからず、夫れ將畧軍事を評價せむと欲せば勝敗利鈍の上に徴せざるべからず、然れども詩人の如き文藝の如き單に世上史傳の傳ふる所を以て徴すべからず、況んや信仰を主眼とする宗教家に至りては表面の事實を記載する史傳の能く真相を傳ふるものならむや。吾人以爲詩人若くは宗教家の眞價を知らむと欲せば直ちに親しく其筆に成る遺著につきて實驗感得するを要す、屈原を知らむと欲せば須らく離騷を味ふべし、ダンテを知らむと欲せば須らく神曲を味ふべし、孔子孟子エビクテ、タルターク等各其遺著は實に生ける人格を百代に傳ふるもの、一たび之を繙けば髮髯として其音容に接するの想あらしむ。此點に於ては吾人親鸞聖人を知らむとするもの、教行信證の六軸を繙きて眞摯堅實一點の修飾なき信念を味ひ、和讃を拜誦して讚美嘆咏溢るゝばかりの感謝を仰ぎ、其他假名諸書の平易反覆親切を極めたるを細讀するに至りては聖人の人格は躍如として眼前に示現し玉ふなるべし、然れども此の如きは信仰其の物を知り得るのみ

にして、如何にして此の如き信仰に達し玉ひしや。又此の如き信仰を以て如何に一生を始終し玉ひしかに至りては知るべからず。夫れ詩人は自己を歌ふものなり、宗教家は自己を告白するもの也、然れども彼等は決して自己を語らざるもの也、夫れ歌ふものは其理想を知るべし、告白するものは其信仰を知るべし、然れども其理想に達したるの實驗と、其信仰によりて生活する實行とに至りては之を語るものなくむば之を知るべからず、而して之を語るものは彼の理想を了解し、其信仰の感化を被るものにあらずむば其真相を得ること難かるべし、此點に於て吾人は確かに四阿舎の釋尊に於ける四福音の基督に於ける大なる價值を認めずむばならず。今や我親鸞聖人に於ても其遺著に就きて聖人の理想と信仰とを認めたるの外、更に其理想と信仰とを以て實驗實行し玉ひし九十年の人生に至りては當時聖人に親炙せし遺著、追慕せる信徒の語る所を聞かざるべからず、此意味に於て現今傳繪詞及正統傳の存するは實に聖人の信仰が人生の上に活躍せる記録にして、少くとも聖人の信仰を傳へたる遺弟の眼に映じたる聖人の人格なり。此に於てや嘗て吾人が史傳として價值を疑ひたる靈夢若くは談話の如きは頗る貴くして、特に主觀的感想を基とせるが如き、却て信仰的産物として價值ある所以也。特に傳繪の如き一篇盡く詩的眼光と信仰的情操とを以て味ふにあらずむば決して著者の心絃に觸るゝ能はざるもの、其文字簡潔にして要を摘み、靈想深邃にして人を導きて絶對の境に遊はしむ、故に年代の順序に關せず文字の長短を顧みず、忽にして夢を説き忽にして靈感を洩す、直ちに聖人の遺著を引用し、徐ろに聖人の記録を誌す、師弟の對坐あり、聖人の説教あり、詳かに聖人の系圖を述し、一言にして聖人の臨末を寫す、事實斷片の如くにして脈略あり、時に理想を描きて事實を暗示し來る、勿々筆を執れるが如くにして用意頗る周到、口碑を畫くが如くして皆確實なる事實に基かざるはなし。吾人は先づ此傳繪を立點として進みて聖人の遺著に涙り、以て聖人か一生に於ける眼目たる家庭の如何なりしかを味ひ奉らむかな。曰く、

建仁三年癸亥四月五日夜寅の時、上人夢想の告まし／＼き、かの記云、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白袈の袈裟を著服せしめ、廣大の白蓮華に端坐して、善信に告命してのたまはく、行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂文、救世菩薩善信にのたまはく、これはこれわか誓願なり、善信此誓願の旨趣を宣説して、一

切群生にさかしむへしと云、爾時善信夢中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば峨々たる嶽山あり、その高山に數千萬億の有情群集せりとみゆ、そのとき告命のごとく、此文のこゝろを、かの山にあつまれる有情に對して説きさかしめ畢とほほえてゆめさめ畢云、情この記録を披き、かの夢想を案するに、ひとへに眞宗繁昌の奇瑞、念佛弘興の表示也。蓋し是れ聖人傳中に於て最も神怪を極むるの所、古來之を信するを難んずるの事實也、甚だしきに至りては後人の尊崇附説に出でたるかの如き疑問を挿むものありき。然れども是凡人が自己の經驗を以て、偉人の經驗を疑ふもの、謹まずむは、あるべからず。傳聞らく、西佛房は聖人が出家得度の時より伴ひたる弟子也、聖人慈鎮和尚に隨ひ玉ひし時は彼亦慈鎮和尚に事ふ、聖人法然上人に隨ひ玉ひし時は彼亦法然聖人に従ふ、聖人三十五歳配所に就き玉ひし時は彼亦配所に隨ひ奉りし也、流罪中聖人自筆の日記あり、之を日次の日記といふ、而して西佛房亦日記あり、之を白鳥の日記といふと。聖人没後覺如上人遺跡を訪ひ信州に到り、西佛房の住せし寺、即ち白鳥山康樂寺に止り、西佛房の子淨法眼に會して、詳かに其傳説を耳にし、共に遺跡を歴訪し、最後に覺如上人自ら筆を探りて傳繪の詞を書し、淨法眼圖繪を書き奉りしもの即ち此傳繪也といふ。今や文中彼記に曰くといふもの、恐くは上人日次の日記に出づるにあらざるか、若し然らざらむには他の白鳥の日記に出づるにあらざらむや。予昨年夏信州康樂寺に詣して聖蹟を尋ぬ、靈場廢頽を極め、行人をして空しく懷古の涙を灑がしむ、普く調査を極むるに緣起中嘗て此等日記の存在せしことを傳ふと雖、現時少しも其零碎だに存するなし、洵に惜むべしとなす、然れども此傳繪詞中に於ける彼記なるものは確かに日次の日記若くは白鳥の日記たりしならんと云へることを推察することを以て満足せむ。

吾人は直ちに靈夢の幻影につきて其信念の深邃なるを味はむかな、古來此事件に對して徒らに事實の眞偽、結果の是非を論ずるに止りて、聖人が人生に對する微妙なる信念を發揮せざりしは實に千載の遺憾と云つべき也。古來聖人を追慕するものは此の事實を盾にして肉食妻帶の宗風を是認せむと試み、眞宗を毀すものは肉食妻帶の宗風に對する辯護として嘲笑を極めたりき、而して何れも是れ恐くは聖人の眞意に協はざるもの、聖人を讚するも既に其道に非ず、聖人を毀つも亦其標的を誤る。聖人既に懺悔して曰く悲哉愚弄、沈沒於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可耻可傷矣と、聖人既に

無戒名字の比丘を以て自ら居る。若し此靈夢を以て聖人を辯護するが如きは恰も聖人が懺悔に對して頻りに打消さむと試むるが如きもの、寧ろ聖人が沈痛なる懺悔に感泣して、各自亦其愛慾の廣海の深くして底なきを懺悔し奉るべき也。

吾人は此靈夢其物より聖人が家庭に對する偉大なる人生觀を味ひ奉るの微光を認めたり、吾人は聖人の信念が如何に人生家庭の上に活躍せるかを知るを得たり。而して此夢想は確かに觀音菩薩の誓願を示現し玉ふもの、曇鸞大師園林遊戯地門を釋して直ちに法華經の普門示現の如き是也と宣ふ、他日慧師の骨髓を櫻みて往還二種回向を以て一宗の根底としたまひたる聖人は何ぞ現實界に薩埵の示現を感得し玉はざるの理あらむや。傳へ曰ふ、聖人年十九歲七月中旬和州法隆寺に詣し、九月十日余、河内國磯長聖德太子の靈廟に詣し、三日間參籠し玉ひし時左の靈告を得玉へりと、曰く

我三尊化塵沙界。

日域大乘相應地。

諦聽諦聽我教令。

汝命根應十餘歲。

命終速入清淨土。

善信善信眞菩薩。

是實に聖人が苦悶の根本たりしといふ、太子既に告命して汝命根應に十餘歲なるべしといふ、是聖人を驅りて切實なる求道心を起さしめし所以、爾來十年修道少しも怠らず、普く經藏に入りて盡さざる所なし。最後に至りて隱遁の志深くして眼中心事を顧みず、或は斷食をなし、或は密行を修し、初は山王權現に祈誓し、遂に叡山より京都六角堂へ一百日の懇念を運び玉ふ何人が聖人が求道の態度に優るものあらむ。而して遂に六角堂觀音大士の告命を蒙り、四條橋上聖覺法印の指導によりて建仁第一の曆春の比、初めて吉水法然聖人の禪房を叩き、一場の法話、南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本の旨を授かり玉ふ、此に於てや聖人積年凍凝せし胸中は一朝慈光の光益を蒙り渙然として既に菩提の水となる。後年聖人自督を傾けて曰く、親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまいらすべしとよき人の仰を被りて信する外に別の仔細なきなり乃至法然聖人にすかされまいらせ念佛して地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候と信念竿として抜くべからず、法然聖人の命令は直ちに是れ佛陀の命令、生殺與奪委ねて先師の下に在り。既に此の如き信心歡喜の靈境に遊び玉ふ、種々の靈感髮鬘として聖人の腦裡に道交し、夢

寐の中に恍惚として佛陀の間に咫尺し玉ふもの決して怪むに足らざる也。況んや六角堂は是れ聖德太子の建立にして、太子は直ちに是れ觀音の垂迹たるに於てをや、嘗て聖人を導きて道を求めしめ、聖人を導きて先師の門に赴かしめ、聖人を導きて大慈の光明に接せしめし聖德太子及び觀世音菩薩は、又聖人の一世の化導を輔翼し玉ふこと豈一點の疑を容るべきの余地あらむや、聖德太子和讃を拜誦し奉れば聖人が感謝の情は油然而して溢るゝものあるにあらずや曰く、

救世觀音大菩薩

聖德皇と示現して

多々のことくすすして

阿摩のことくにそひたまふ

無始よりこのかたこの世まで

聖德皇のあはれみに

多々のことくにそひたまひ

阿摩のことくにねはします

聖德皇のあはれみ

佛智不思議の誓願に

すゝめいれしめたまひてそ

住正定聚の身となれる

大慈救世聖德皇

父のことくにおはします

大悲救世觀世音

母のことくにあはします

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますしるしにはは

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

聖德皇のあはれみに

護持養育たへすして

如來二種の廻向に

すゝめいれしめおはします

101
嗚呼聖人が夢中感得し玉ひし四句の偈文は實に神聖なる靈感、慈愛の示現にあらずや。古來女犯の文字あるか爲に、平田篤胤の輩嘲笑を弄すと雖、是畢竟宗教的感想を味ふ能はざるの故のみ、決して之を以て聖人を煩はすに足らず、蓋し女犯の文字は當時一般に用ゐられし用語にして既に熊谷蓮生房に對する法然上人の消息にも之を書したり、嵯峨清涼寺に藏す。況んや一生之

間能莊嚴、臨終引導生極樂の文字に至りては眞個に是れ信仰的家庭の本色を發揮したるもの、千古清淨皎潔なる高風を欽慕し奉らずむはあらず、實に聖人の家庭は理想によりて善化し美化し靈化されたるなり、聖人は其夫人を靈化し玉へり、佛化し玉へり、靈は外界の如何によりて變化するものならむや、佛は生死の如何によりて分離するものならむや、此に至りて靈の靈たる所以を知り、佛の佛たる所以を見る、寧ろ肉的身體の滅したるときに靈の清淨を現はし、俗的人生を脱したるときに佛陀の樂境に入る、嗚呼靈界は時間に限らず、佛境は空間に局せず、何ぞ現世と未來世とを問はむ、生れて生死蘭林の間に遊戯して有縁の衆生を度し、死して彼岸の樂土に往生して無爲涅槃の域に逍遙す、嗚呼如來の智慧海は深廣にして涯底なし二乗の測る所に非ず唯佛のみ獨り明らかに了り玉へり、是實に自然法爾、無義の義なるもの、吾人思議の境にあらざる也。

プラトンは其會話篇フェドルスの中に理想の愛を叙すること頗る詳かなり。曰く、美は天上の容姿に伴ひて輝きつゝある者、彼若し地上眼前に來ると雖、是最も純潔なる感覺の間隙を求めて其清淨無垢の光を發洩する者、若し人世に生れて素撲にして猶且つ前世に於て常に榮光に觀得したりし人は其神の清貌を見て神聖端嚴の相好に驚愕せざるはなし、先づ一瞥の下竦として身戦き、亦宿世畏敬の餘情は自ら油然として湧き來り、恰も神に對するが如く、尊崇の念禁する能はず、若し他に狂人を以て目せらるゝにあらずむは恰も神像に對するが如く身を投して之が犠牲たるを辭せざるべしと。蓋しプラトンの理想愛なるものは頗る高潔なるものなりと雖、未だ醇乎たる宗教の信念に達せず、然れども猶神を以て之を見る。聖人の如き信仰醇熟の極に達せるもの、此の如きの靈想の涌き來る決して怪むに足らざる也。

ダンテに至りては泰西に於て古今唯一の詩聖なり、而して彼か詩想の中心は實にベヤトリチエなり、彼は彼女を以て天使となし、恰も之に對するやホーマーの所謂「彼は人間の子にあらずして神の子たるが如し」とは彼か感想の眞髓なり、殊にダンテは種々の靈夢を感得せり、而して何れも宗教的趣味を以て着色せられ、素撲にして修飾なく、神秘にして深遠ならざるはなし、是「新生命」に於て見る所なり。而してベヤトリチエの死するや彼は肉に於て之を失ひ靈に於て之を得たり、而して彼か『神曲』の中心として歌ひ、彼か神學の中心として、彼女の導の下に遂に天國に入るに至れり、ベヤトリチエは實に彼に對する

唯一の救濟者なり。ダンテの夢幻は之を彼プラトニに比較するに一層宗教的にして且つ頗る靈的のものたりき、然れども猶、彼か九歳の時一たび彼女を見、十八歳の時、再び道に邂逅せしより起りたるものにして、本、人間的愛情に基因せしもの、沈痛なる幾多内心の煩悶は之を鍛鍊して、遂に之を靈化し、之を神化し、最後に自己亦信仰に導かるゝに至りし也。

此の如く泰西の思想を咀嚼し來りて、醜て我親戀聖人を願るに實に其靈想の如何に飄渺として且つ清淨なるかに驚かずむはあらず、聖人の夢想は全く靈的にしてプラトンの理想愛の如き其清貌に接したるが爲めにあらず、ダンテの如く幼時より抱けるものにもあらず、信仰縁熟の後一夜忽爾として夢中之を感得し玉へり、實に是豫言的性質を帶ふるもの、苟も宗教的經驗ある人は必ずや容易に首肯することを得べき也。而して世の傳ふるが如く先師直ちに之を鑒察して兼實公の懇請に従ふべきを命し、聖人直ちに斷じて公の愛子玉日君と良縁を結び玉ふ、實に是れ佛教歴史中に於ける破天荒の事實なる者、聖人の確信を見るべき也。蓋し聖人が信念は遂に現實界の上に佛陀救濟の引導を感じ玉ふこと管に聖德太子を以て觀世音の示現なりと見玉ふのみならず、又先師法然聖人を以て大勢至菩薩の權化として智慧の念佛を授け玉ひたるものなりとし、深く其恩徳を感謝し玉ひたり、故に先師と共に流涕に處せらるゝや却て是師教の恩致なりと喜び玉ふ。傳繪詞に聖人が胸臆を披きて曰く、

しかれば聖人後の時おほせられて云く、佛教むかし西天より興りて、經論いま東土に傳はる、是偏へに上宮太子の廣徳山よりもたかく、海よりも深し、我朝欽明天皇の御宇に、これをわたされしによりて、すなはち淨土の正依經論等此時に來至す儲君もし厚恩をほどこしたまはずば、凡愚いかでか弘誓にあふことを得む、救世菩薩はすなはち儲君の本地なれば、迹垂興法の願をあらはさんがために、本地の尊容をしめすところなり、抑又大師聖人(源空)若し流刑に處せられたまはすは、我亦配所にねもむかや、もしわれ配所におもむがずんば、何によつて邊鄙の群類を化せん、是なを師教の恩致なり、大師聖人すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂迹なり、このゆへにわれ二菩薩の引導に順して如來の本願をひろむるにあり、眞宗これによつて興し、念佛これによりて熾なり、是併ら、聖者の教誨によつて、さらに愚昧の今案をかまへす、彼二大士の重願た、一佛名を專念するにたれり、いまの行者錯て脇士につかふることなかれ、たゞちに本佛をあふぐべしと云云、故に上人

親鸞傍に皇太子を崇たまふ、けだしこれ佛法弘通の浩なる恩を謝せんか爲なり。
念佛停止、法然聖人已下死罪流罪の大迫害来る、蓋し是れ佛法弘通の大逆縁なるもの。古者釋尊の説法五天に逼くして教團益
隆盛を極めむとするの時即ち提婆阿闍世の逆悪あり。又和國の教主聖德皇大乘佛教を興隆して萬民其光に浴せむとするの時物
部守屋の迫害あり。聖人後日和讃を作りて曰く

物部の弓削の守屋の逆臣は、
生々世々あひつたへ

かけのこづくにみにそひて、
佛法破滅をたしなめり

つねに佛法を毀謗し
有情の邪見をすゝめしめ

頓教破壊せむものは
守屋の臣とおもふへし

嗚呼念佛停止の迫害は是れ王舎城悲劇の再演、守屋逆臣の再現にあらずや。然れども水激せられて初めて其力を現はし、世闢
ふして法燈却て明らかなり、聖人流刑の迫害は却て是れ正法を興し玉ふ一大因縁にあらずや、承元元年三月十六日聖人華洛を
出て北陸の邊陲に赴き玉ふ。先師法然上人は西の方士佐に向ひ、親鸞聖人は東の方越後に向ひ玉ふ、實に是れ師弟今生の別離
たりし也、聖人道々傳道して配所越後國國府に就きて草庵を結び玉ふ。傳へ曰ふ、聖人夫人玉日君は聖人流謫の後一門の密議を
以て表面には病を稱し、假りに三善兵部大輔爲教の女と唱へ、池田權頭是貞を扈從たらしめ、白川局、鳴瀬局等を具して配所
に下り聖人の化儀を助け玉ふ。聖人越後より信州に移り、次に常陸に移り稻田の草庵に道俗を勸め玉ふや、玉日君亦隨ふて常
に内助の力を盡し玉ふ、慧信尼公即是也といふ。傳繪詞に曰く

聖人越後國より常陸國に越て、笠間郡稻田郷といふところに隱居し玉ふ、幽栖を占といへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉と

いへとも貴賤衢に溢る、佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す、この時聖人、おぼせられてのた

まはく、救世菩薩の告命をうけしいにしへの夢すてに今と符合せりと、

嗚呼東方を見れば峨々たる嶽山ありといふもの、今や事實となりて實現せられぬ、聖人感泣して我二菩薩の引導に順じて如來

の本願を弘むるに在りとの玉ふ所以のもの聖人の胸中言ふべからざるの靈感を以て満たされ玉ひしものならむ、此に至りて往時
六角堂の告命豈空しく見るべけむや、聖人が一代聖德太子を尊崇して奉讃恭敬怠らざりし所以のもの、豈深く私淑せしところな
きにあらざらむや。

聖人流刑の中自ら稱して愚禿といひ、非僧非俗の化儀を示し玉ふ、是遠く上宮太子に則り玉ふもの、聖人が太子に於ける因
縁一日にあらざる也。夫れ聖德太子の家庭たるや聞満にして共に深く佛法を尊信し玉ふ、蓋し聖人の私淑し玉ひし點なるべし。

聖人の作大日本國粟散王聖德太子奉讃一百十四首あり八代願永寺に傳ふといふ、其中に曰く

上宮太子の后妃は
かしはての氏の夫人なり

御かたはらにさふらふに
太子かたりてのたまはく

君わがころのごとくにて
ひとつのこともたがはねば

まことにさいはいなりけりと
太子の御意にあひかなふ

われしになんその日には
あなしくあないうづむべし

きざきこたへてまうさしむ
千秋萬歳いつまでも

あしたゆふべにいたるまで
つかへまつらむとそおもふ

いかなるころいましてか
をはりことを令旨ある

太子こたへおはします
はしめあれはれはりある

さたまれるよのことはりを
ゆめくちどろきおもはされ

ひとたひかならずむまれしめ
ひとたひはかならずしぬること

人のつねのみちなれば
むかしもいまもたえぬなり

われあまたの身をうけて
佛道を行ひきたらしむ

わづかに小國の太子として
法なきところに一乗の

たへなるみのりを流布せしむ
深義をひろめときをさつ

五濁のあしき世世までも

ひさしくあろはむとおもはれず

ささなみだをながして

かなしみあはれみまし／＼さ乃至

太子みやこにまし／＼て

ささにかたりおはします

たゆあみくしをあらはせて

さよき御衣をうきたまひし

われもろともにこよひは

さりなむとゆかをならべてぞ

ふしまろびぬとみえたまふ

あくるあしたにひさしくも

御かほものごとくにて

はなはだかうはしくおはします

御とし四十九歳なり

佛法のとしひきえたまふ

宗教的信仰によるにあらざるは何ぞ此の如き理想的家庭を形作るを得む、蓋し是れ偉大なる信仰を基礎として生し來りたる所即ち聖德太子は慈悲の權化として觀音の化身たり、而して檀手の夫人は智慧の權化として大勢至の示現なり、而して太子の母橋人の皇后に至りては西方の教主彌陀佛の來化し玉ふ所、此の如き偉大なる確信は遂に此の如き家庭を作り來り、猶三骨一廟に葬りて後長へに其靈蹤を遺し玉ふ、是實に磯長の聖德太子の廟にあらざるや、聖人十九歳參籠して求道心を起したまひしは實に此廟下にあらざるや、後年別に聖人の作皇太子聖德奉讚七十七首あり其奥書に曰く

南无救世觀音大菩薩 哀愍覆護我

南无皇太子勝鬘比丘 願佛常攝受

皇太子佛子勝鬘

是緣起文納置金堂内監不可披見手跡痕

乙卯歲正月八日

拜見奉讚人者南无阿彌陀佛可唱々

建長七歲乙卯十一月晦日書之

愚禿親戀 八十三歲

文松子傳曰

大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從西方、誕生片州興正法、我身救世觀世音、定慧契女大勢至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊、爲度末世諸衆生、父母所生血肉身、遺留勝地此廟嶺、三骨一廟三尊位、過去七佛法輪所、大乘相應功德地、一度參詣離惡趣、決定往生極樂界、涅槃經言、如來爲一切、常作慈父母、當知諸衆生、皆是如來子、世尊大慈悲、爲衆修苦行、如人著鬼魅、狂亂多所爲、

此文松子傳の文字は聖德太子の理想の極を言ひ盡したる者、而して聖德太子は是親鸞聖人の理想にあらざるや。結末涅槃經の文字は實に梵行經阿闍世王の苦悶と救濟とを叙し畢りて後阿闍世王か佛恩を讚嘆し奉りし偈頌の文句也、聖人既に之を引用して信卷に在り。嗚呼如來は一切の爲めに常に慈父母と作り玉へり、當に知るべし諸の衆生は皆是如來の子也、豈廣大なる佛心にあらずや、須らく吾人一切の衆生は深く如來の矜哀を仰ぎ、遠く大悲の善巧を感謝し奉るべき也、世尊大慈悲を以て衆の爲めに苦行を修し玉ふと人の鬼魅に著せられて狂亂して所爲多きが如し、嗚呼哀々の情骨に徹し、忉々として深愛を抱く、佛陀の大慈凝りて聖德太子となり、佛陀の靈智鍾りて定慧契女となり、而して大悲の母は西方教主彌陀尊の示現し玉ふ所、實に理想的の宗教家庭にあらざるや。此文は磯長廟の金堂内監に納むるもの、聖人十九年參籠の時我三尊化塵沙界の告命を受け玉ひしもの豈偶然ならむや。而して此の如く聖德太子と因緣深き親鸞聖人か一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂の告命を得得し、亦聖德太子を理想として信仰的家庭を作り玉ひしもの豈不可思議の事實と云はざるべけんや、然れども此の如きは信仰的眼光に於てのみ映するもの其化儀に至りては飽迄無戒名字の比丘、愚禿在俗の行狀を表する所、聖人懺悔して愛欲名利の徒なりと自白し玉ふ。之を彼のルイテルが一朝ニムツヒの修道院にありしカタリヲと結婚せしに比するに一層斷乎なる處置と言はざるべからず。而してルイテルが當時世人の非難を招きしが如く、聖人に對する痛罵嘲笑の聲は雨の如く注がれたるなるべし。然れども此の如きは固

より聖人の信仰を解せざるの徒、寧ろ聖人は此の如きの人をして佛陀救済の德音を聞かしめむことを念し玉ふ。親鸞聖人秘傳集(存覺師作)に曰く嗚呼哀哉乎釋迦如來は慈悲の父母として五道の窮子を導かんが爲めに瓔珞細粟の實衣を脱ぎて疎弊垢膩の綴を召し、不輕大士の昔は詈罵打擲の邪人をも禮して深心佛性のうづだかさを顯示したまふ、大聖文殊のちかひには我を敬ふよりは打誹罵輕するものをばさきにたすけんと願ひ、龍樹菩薩の別行にはわざと外道の家に生れて捨惡止善の正法を興し玉ふ、眞哉乎妙哉乎法門無盡といへること。嗚呼此に至りて吾人亦言ふ所を知らざる也、想ひ見る、聖人十九歳の靈夢二十九歳の靈告、東國の傳道、晩年の奉讚、始終一貫して佛陀の哀愍攝受を得て如來の本願を弘め玉ふこと、豈無限の感謝に泣き玉はざらむや、如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主智識の恩徳も、骨を碎きても謝すべしと宣へる豈偶爾ならむや。

此の如く聖人の家庭は信仰を以て中心とす、是あれば即ち夫婦たり之あれば父子たり兄弟たり、故に夫婦必ず靈の夫婦たらざるべからず、親子必ず靈の親子たらざるべからず。若し信なからむか、たとひ肉の親子たるも眞實の親子たらざる也、聖人此の如き場合に於ては涙を揮うて肉を去りて靈を取り玉ふ、看よ實子善鸞大徳は信仰異なるが爲に遂に絶縁し玉ひにあらざるや、聖人の家庭が如何に神聖にして眞實なるかを仰ぎ奉るべき也、若し家庭にして信を同せず、靈を以て交らざるものは是肉の夫婦虚偽の親子と謂つべきのみ。故に聖人の夫人が如何に聖人を見玉ひしか、又其夫人が如何に其愛子を教育せられしかは次の一文に徴して明らか也。口傳鈔に曰く、

下野の國さぬきといふところにて惠信の御夢想にいはく、堂供養するとおぼしきところあり、試樂ゆしく嚴重にとりてこなへるみぎりなり、こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすかたにて木をよこたへたり、それに繪像の本尊二鋪かゝりたり、一鋪は形體まします、たゞ金色の光明のみなり、いま一鋪はたゞしくその尊形あらはれまします、その形體ましまする本尊を、ひとありて、またひとに、あれはなに佛にてましますやと問ふ、ひとこたへていはく、これこそ大勢至菩薩にてまします。すなはち源空聖人の御ことなりと、云々、また問ふていはく、いま一鋪の尊形あらはれたまふをあれはまたなに佛ぞやと、ひとこたへていはく、あれは大悲觀世音菩薩にてましますなり、あれこそ善信の御房にてわたらせたまへと、ま

ふすとねほえてゆめさめをはんぬと云々、このことを聖人にかたりまふさるゝところに、そのことなり大勢至菩薩は智慧をつかさどりまします菩薩なり、すなはち智慧は光明とあらはるゝによりて、ひかりはかりにてその形體ましまするなり先師源空聖人勢至菩薩の化身にましますといふこと、世もてひとのうちにありとおぼせことありき、鸞聖人の御本地の様は御ぬしにまふさんこと、わが身としてははゞかりあれば、まふしいたすにねよばず、かの夢想ののちは心中に渴仰のれもひふかくして、年月をおくるばかりなり、すでに御歸京ありて御入滅のよしうけたまはるについて、わがち、はかゝる權者にてましますけると、しりたてまつられんがために、しるしまふすなりとて、越後國國府よりとゞめをきまふさるゝ惠信の御房の御文、弘長三年春のころ御むすめ覺信の御房へ進ぜらる、わたくしにいはいはく、源空聖人勢至菩薩の化現として本師彌陀の教めに、師弟となりて口決相承ましますことあきらかなり、あふくべし、たうとむべし、是實に聖人示寂の翌年の説話に係る者、此年九月十六日惠信尼公遺言して曰く、親鸞の仰も外の事候はず、はからはす、たゞ稱名喜ぶ計りに候、別に珍らしき事候は、ななき御別と存じ候、御信心にかはりなき人には淨土にて蓮の對面申へく候と、越へて十八日遂に臨終引導生極樂の本懷を遂げ玉ふ、嗚呼。

信仰或問

佛陀は慈悲の塊也

人あり問て曰く、我佛陀を理解するに苦む、之を諸師に尋ね奉る。中には真如のことなりなど申さるれど、先づ一般に慈悲の塊なりと答へ玉ふ、されど慈悲の塊とは如何なるものなるか、遂に理解すべからず、我真面目に信仰を求めつのあるなれど、佛を理解せざる故に信仰すべからずと。我答ふらく、御尤なれど御尋の様子にては理屈て佛を求め玉ふとみえたり。佛陀は理解して信するものに非ず、信じて初めて理解出来るものなり。有形のものは五官の力によりて認識し、道理は推理によりて理解し、佛陀は信仰によりて認識し理解するなり。佛は慈悲の塊也といへる言を君の如く冷かなる語氣を以て語り玉ふやうにては石の塊なりと云ふも同じことなり、勿体なきことにあらずや。佛を真如と云ふも誤にあらざるも真如と云ふことを冷かに云ひなす世の中ゆへに止むを得ず塊と云ひたるのみ、實に言語に絶したる廣大なる御憐みを垂れ玉ふなり、其不可思議なる御佛の境界を真如とも申す也。われかく君と佛の御慈悲を語るを得るも御佛の御慈悲なり、君が只今見る御佛の慈悲を味ひ玉ふも御佛の御力也。聖人が如來の御催にあつかりて念佛申し候人を我弟子と申すことさばめたる荒涼のことなりとは此御心なり、唯如來の御催なり、何事の在すかは知り難しと、知らず識らず慈悲に感じて語りしかは其人始は大に驚き、遂には涙を流して舊惡を懺悔して御慈悲を仰ぎ奉り玉ひぬ。

喜ばれざる事によりて喜ぶ

人あり問て曰く我佛陀に對して決して冷かなる考を以て見奉らず、又少しも疑を挿まず、されど少しも喜の心起らず、いかゞ致すべきやと、憂色顔にあらはれ忡々の情、坐ろに人を動かす。我何とかして御慈悲を味はせたく考へ、直ちに我疇昔、苦しみて御慈悲を味ひし當時を語り、或は他の光を認め玉ひし實例など語る、されど喜ばしくならぬと答ふ。我心の中に少しは感ずべき筈なるにと思ひつゝ、猶繰返す。其人ますく憂の雲深くして閉して開かず、我力盡きて曰く明日再び來り玉へ、今夜よく我言ひしことを味ひ玉ふべしと、其人辭して去る。翌日我學校に行きて授業し、急ぎ歸る、其人既に在り、忽ち又我喜を叙すること前日の如し。談話中偶然以爲らく我此人の顔を見るや直ちに我喜を語る、されど昨日此人去りてより今日まで如何程喜びたりしや、寧ろ業務の爲に忙殺せられて喜びしことなし、而して此人を見れば喜を語る、此人の喜ばぬは尤のことなり、此顔色にては昨夜此人は眠らざりしなるべしと思ひて尋ねしかば然りと答へぬ。我が先きに語りし事は事實にして偽なきも、喜ばしくと云ふ程に昨日來喜ばざりしは事實也と思ふ、中心我乍ら耻かしくなりて遂に其儘に白狀しぬ。其時不圖心中に閃めきたるは「念佛申し候へども踊躍歡喜の心疎かに候事、又いそぎ淨土へ参りたき心の候はぬはいかに候へべき事にて候やらむと尋ね入り候しかば、親鸞も此不審ありつるに唯圓房同心にてありけり」との御言なり、聖人は我はかく喜びぬ、汝なせ喜ばぬやとはの玉はず、何の飾もなく直ちに親鸞も此不審ありつるに唯圓房同心にてありけりと宣ふ、我聖人に對して申譯なし、昔の喜を強て呼び起さんと試みしむるも此人を喜ばせんと企てしも皆我計にてありけり。親鸞も此不審ありつるに唯圓房同心にてありけりとの御言は昨日來喜ばざりし我に對して聖人直接に同情を表し玉ひし心地して嬉しくなりぬ、よく案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべき事を喜ばぬにていよく往生は一定と思ひ玉ふべきなりと云す、味深くなりぬ。「喜ぶへき心をさへて喜ばせざるは煩惱の所爲也、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなればかくの如きの悲願は我等が爲なりけりとしられていよくたのもしく覺ゆるなり、嗚呼いよくたのもしく覺ゆるなり」と。此人忽ち喜びて曰く我始めて喜ばしくなりぬと、我もいたく喜び此人も大に喜びて去りぬ。

無限の慈悲は事實也

人あり問て曰く、他力の教は安慰を與ふるに可なり、されど人の奮勵を枯死せしめ、罪惡を増長せしむる處なきかと。我答ふらく、他力の教は救濟の極所を示し玉ひしものなり、我善行を勵まむとするに忽ちにして破る、いかゞすへきや曰く「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆゑに」と宣ふ。人あり我舊惡を顧みれば慚愧身を措く所を知らず、夜半之を憶ふて苦に堪へざるなりと。曰く「惡をも恐るべからず彌陀の本願を妨ぐるほどの惡なきが故に」と宣ふ。此に於てや無限の慈悲に感泣せざるべからず、既に感泣するもの冥見を恐れ、感謝の念起る、他の善も要にあらずとて奮勵心を枯死せしめ、惡をも恐るべからずとて惡を増長する人は信仰感泣したる人にあらざる也と。其人了解せるもの、如し、されど猶心残りせる趣にて問て曰く。されど猶其處なきか、我曰く、處あるか、なきか、我知らず。信仰には政略なし無限の慈悲は事實也、恰も放逸飲酒にして浪費極なき息子に對して親の慈愛無限なるが如し、親與ふればとて放逸の止まざるは未だ慈悲を感ぜざる也、親甘きが故に子が狎るゝ也とは傍より他人の冷かに評する言也、親は子の放逸甚しければ慈悲愛益々甚し是事實也、吾人の上に此の如き無限大悲の如來の臨み玉ふ是疑なき事實也と。問ひし人も言ひし我も無限の慈悲に驚きて感泣しぬ。

内愚外賢

(求道學舎講話)

近角 常觀

本日の題は「内愚外賢」としておきました、これは御存知の通り親鸞聖人の言葉である。聖人は常に自分の事を「愚禿」「愚禿」と言はれた、どうも度々申すが、私はいつも親鸞聖人の人格とか、親鸞聖人の信仰とが、親鸞聖人の事のみを言つて居る。併し如何程謂つても、とても充分に御話ししきる事が出来ぬ。勿論其の信心の味ひに至つては、平素と毫も變はりはないのであるが、いつても、言つた後から見ると、やつぱり自分勝手に引きつけて居つて、どうも充分に解かつて居ない。つまり解かつた丈けしか言へぬのである。いつも後から氣づきては、ふかく恐れ入る次第である。この愚禿といふ語に就てもおなじである。聖人が愚禿と仰せられた事は已に度々申し、自分でもよほど解かつた積りて居つた。後から見るとやはり夫れがほんとしてない。今日申す處も後になれば、必ず不充分なことであらうと思ふ。亦この席で不足と感ぜらるゝ方もあるかも知れぬ。私はなるべくそうゆふ方の感じをさかせて頂き度いのである。

偕て、今迄別に何んとも思はなんだが、親鸞聖人の著書の中に「愚禿鈔」といふのがある。これは眞宗の方はよく御存知のはづである。眞宗に於て肝要がつて居る丈け、それだけ大切の聖教である。この「愚禿鈔」といふ題號からして非常にあもしろい。聖人の御心では或は愚禿の覺え書き位であつたかも知れぬ。それから其の書き方がまたよほど變つて居る。一寸言つて見れば一つには聖道、二つには淨土、一つには頓教二つには漸教、……と頭から先づかういふ具合で、實におもしろい。華嚴鳳潭といへば、徳川時代の佛學者であるが、これを見て親鸞の胸付けに違いないと謂つたそうぢや。親鸞聖人極く晩年の作である。唯これ丈けを見ても、聖人のやり方がよくわかると思ふ。ことに奇妙な上巻下巻共に一日書いてあることで、卷末の日附けが「二卷共同日になつてある。或は前に書いてあつたのを、其日に清書せられたのかも知れぬが、併し何となく一日に書きあげられたもの、様にも思はれる。兎に角現今の版では卷末の年月日が全く同一になつて居る。さて初めに今の愚禿鈔と題號があつて、其の下へ直ちに「賢者の信を聞いて、愚禿が心を顯はす、賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり」唯これ丈けの六句が出してある。文は極はめて簡單であるが、愚禿の意義はこれで充分にわかると思ふ。人の内賢にして外愚であるが、愚禿のは外は賢でも内は愚であるとは如何にも難有い言葉である。私は愚禿といふ文字に就いて、色々考へて見た。化身土の卷には「爾れば已に僧にあらざる俗にあらず、是の故に禿の字を以て姓とす」と誌してある。又

よく申すのであるが、涅槃經の中には破戒の人を以て禿人とするといふ文があることを知つた。私が發見したのでは無いが、深草の元政上人の「如來秘藏錄」を見たら、この文が引いてあつたのである。後から氣がついて見ると、聖人が自ら禿と仰せられたは、どうも其の邊に目をつけられたものらしく思ふのである。御存知の通り聖人は涅槃經を最もよく讀まれた。教行信證の中でも最も多く引用してあるのは涅槃經である。聖人が禿といはれたのはどうして、單に頭に髪があるといふばかりではない。自分は破戒の比丘であるといふ意味が充分にこもつてあるらしい。かく愚禿と言はれた丈けで、聖人の人格はよくあらはれてある。けれどもこれ丈けの考ならば、私は「信仰の余瀝」にも書いておいた。御承知の通り「余瀝の中には、外柔にして内剛なるべし」といふ一章があつて、聖人には内に剛なる處あつて而かも外には柔である。腹の中には佛の慈悲をやどして、而かも表ではごく淺ましいと謂つて御出になると書いて居る。しかしこれでは聖人を讚嘆するとしては差支ないが、其の御心持ちの味ひ方がまだ足らぬ。私はやゝもすると、初めの中は慙ふいふ風に思つたのである。即ち聖人は自ら破戒と看板を掲げて、自分の身をば下げらるゝ丈け下げて仕舞はれたのだと、こう考へた事もあつた。しかしこれでは、自分で自分を欺ぐことがない。倒れて相撲を取る處は見ゆるが、慈悲の意義の味ひ方が足らぬ。内剛外柔であるから、腹の中に佛陀を頂いて、外面人の誹謗等は少しもかまはぬとしても、夫れは無論道理からは明らかに解かる。けれどもそれでは自ら愚禿といはれた味ひが無い。私は、

聖人が自分から態と言ひ切つて仰せられたと謂ふよりも、むしろ自己の悲嘆のあまり、心根から欺げいて仰せられた御言葉と頂くのである。其處の味ひ方がどうも我々は不足して居る。かなしきかな愚禿戀愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚のかずにいることをよろこばず、眞證の證に近づくことをたのしみます、はづべし、いたむべし(信卷)といふこの語氣は單に自分の身を下げた丈けの語ではない。悲いかな自分は到底駄目であると、根底から泣いて居らるゝ形が見ゆるのである。ううなつて始めて先程申した「賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿が心は内は愚にして、外は賢なり」といふあの文の眞味がよほど頂けると思ふ。どう考へても、この文は悲歎を心底から表白せられたとしか見ることが出来ぬ。

この文に就ては古來種々の説がある。或は賢者であるは、即ち御師匠の法然上人を御指しなされたのであるといふ説もある。けれども、そうしては少し都合が悪い。私は唯一般に古來の聖者を御指しなされたので釋尊でも誰でもよいと思ふ。若し單に法然聖人のみとすれば我々から伺ふと少しれかしいやうな氣がする。法然上人は内は賢にして外は愚ていらせらるゝも、親鸞自身は内愚にして外賢であると仰せられたとすれば、丸で正反對である。聖人は常に法然上人とは一の信心だと、仰せらるゝ、而かしこれでは何だか信仰状態が異なつてあるやうに見える。全體信仰から言へば内賢外愚ははじめから話になつて居らぬ。この處は我々のふかく注意せねばならぬ點であらうと思ふ。人あつて自分は非常の悪人で

ある。自分は非常の苦悶をしたと告白する。告白其事は一種の宗教的懺悔であつて、實に立派な事である。けれども、苦悶をしたとか何とか言へば、何だか大變をさうに見せる。やゝともすれば、自分は何か立派な事でもしたかの様な思ひが起る。これは非常によろしくかい、大いに謹しまねばならぬ事だと思ふ。先日も或る人が来て私に自分の苦悶の懺悔をされた。そうして云はるゝには、私は今迄先生の苦悶を大變立派なことと思ふて居たが、結局煩惱の多い事であると話された。實に其の通りである。こゝで云ふては、少し話の順序が轉倒して來るが、どうも近來はこの邊が少し逆しまになつて居はせぬかと思ふ。私などこの二三年前迄は耻づかしくつて、自分の苦悶を人に話しえなかつた。何故かと言へば、自分は、あの時たしかに氣狂ひになつて居つたと思ひ込んでいたからである。ほんとは苦悶の事など人の前で話しの出來るものではない。それから亦近來雜誌などに、よく人の懺悔がのせてある。しかし其の書き方があまりおもしろくない。何んだか其の人が今迄は非常の悪人であつたかのやうに書いてある。これは大きに心得べき事と思ふ。此頃になつて懺悔する人が俄かに多くなつた。多くなつたのは、内心から自分は悪るかつたと自覺する人がふえたからで、懺悔其事は宗教上の意味である。全体懺悔はうつくしき心から出るのである。内心に佛が來玉ふより、發する光りである。人の懺悔は大いに尊敬すべきであらうと思ふ。併し懺悔する方では、決して自分は懺悔をしたといふ氣があつてはならぬ。亦あるべき等はないと思ふ。處が親鸞聖人に於ては、ろういふ點が少しもな

い。賢者とあるは、誰れにしてもよからう。法然上人と見てもよろしい。法然上人は自ら愚癡の法然坊、十惡の法然坊となげて御出になる。さりながら親鸞聖人の眼から見れば、そうは思はれぬ。御師匠法然上人は實に内賢にして、外愚で御出になる、もうどこに一點の打ち處がない。それに比ぶれば、親鸞自身は、いかにも淺ましい事ではないか。少しも内に清淨の心が無い。見渡す限り唯愛欲と瞋恚とである。實に内は愚にして、外に賢を装うて居るのである。ずう／＼しくも表には法衣をまとい、人に向つては法を説いて居るが、いかに悲しい事であると強く悲歡せられたのである。かく悲歡の御言葉と頂けてこそ、はじめて眞意を味はせて貰ふとがでくるのである。この沈痛な悲歡懺悔の御心を味はずに、我々は唯惡人の看板をかけさせられた如くに思ふて居る。これは甚敷く勿体ない事と思ふ。信仰の經驗の時は誰しも自己の罪惡を感じる。感じて佛の光に接するのであるが、一旦信仰を得た後は、時のたつに従ひ、ヤ、もすれば、ろういふ心が起り易い。信後の修養につきては、大いに注意すべき點だと考へる。

處が親鸞聖人に於てはさうでない。晩年になればなる程彌々悲歡が強くなつてある。それはどうかといふに、即ち聖人の御作悲歡懺悔和讃がそれである。この和讃は聖人晩年の作であつて、其有様をよく頌くことが出来る。「淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虚假不實のわが身に、清淨の心もさらになし、眞實の心はありがたし」とはいかに思ひ切つてやられたものである。モウ一點の余地もない、

すつかり惡が言ひ切つてある。殊に其の始めの題目には「愚禿悲歎述懐」としてある。この題目でも、よく伺ふ事がてくると思ふ。こゝに至つてはモウ何とも云ふことが出來ぬ。實にひどい事を言はれたものである。然るに世間往々、この述懐を以て他の意味に解し、當時の惡風を慨しての御述作であるといふ説をなす者がある。これは大變な間違である。無論この中には少しはそれもある。併しその外は凡て皆な御自身の悲歎のみである。「淨土眞宗に歸すれども」とは即ち聖人から見れば法然上人の淨土眞宗である。法然上人の淨土眞宗であれば其の心方は内賢外愚でなければならぬ。しかるに愚禿に至つては、内愚外賢で、内には汚い心をかくしながら、表には賢げな姿を現して居るといふ悲なしみである。この和讃は凡て皆この筆法でてきて居る。「外儀のすがたはひとごとくに、賢善精進現せしむ、貪瞋邪偽ちほさゆへ、奸詐もはし身にみたり。即ちよくいふ、ほかに賢善精進の相を現することをえざれ、うちに虚假をいだけばなり貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性やめがたく事蚰蝸におなじの御文とおなじである。我々は常に、賢しい風をするな。何事も佛に任せよと謂つて居る。しかし聖人の御意では、こんななまぬい話ではない。御互にどうである、外には賢げな顔を爲て居るではないかと自分も夫であることを自覺して、現じてる人に向つていふ語である。今迄は賢しげな顔をして戒を持もとうと思ふた、併し到底出來ぬ、だから有の儘にやれ、といふやうな輕い言ひ方ではない。皆んなか偽善をしてるのである、それ丈けても實に淺ましいとの強い意味である。惡性さらにはや

めかたし、こゝろは蚰蝸のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虚假の行とぞなづけたる」色々善をやつたにしても我々のする事は凡て皆雜毒である。「无慚无愧のこの身に、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」この和讃に至つて始めて佛の光りがはいつて來た。凡てこの悲歎懺悔和讃は、帖外和讃と正反體になつてある。即ち悲歎懺悔和讃の反體に極端の歡びを咏せられたるが帖外和讃である。「大願海の中には、智慧の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり」實によく絶對のよろこびが顯はれてある。斯くの如くよろこびにしても、亦悲歎にしても、兩方とも絶對的にゆるのが親鸞聖人のヤリ方である。惡をいへばこんごろくに惡になる、喜びになればどこ迄も喜びである。超世の悲願さしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ」この和讃でもやはり絶對の喜びが餘りなく顯はれてある。いかに聖人が一點の餘地なく慈光をみとめられたかよく頂ける。かく何れにしても絶對に出て居らるゝからして幾度話しても充分に話すことが出來ない。全体我々は善といへば善、惡といへば惡と、其一方に片よるからいけない。此の間も學舎の或人か來て話なされるには、自分ははじめ何んでも外柔にして内剛でなければならぬと思ふて居つた。處が或る晩不思議な夢を見た。夢の中に一人の僧が御出になつて私に向ひ「内柔でも外剛でもそんなことはどちらでもよいでないか」と告げられた。醒めてから考へて見るに、何ともいへぬ難有い御示であつたとて、大層よろこんで話された。

さく私も非常に難有く感じたのである。内剛でも外柔でもそんな事はどちらでもよいといふ一語には、甚深の意味がある。これだから、かくせねばならぬと思ふと、モウすてに夫れがいかぬのである。

かくの如く聖人の悲嘆は實に強ひ。たとへ我々が、い、や、どう、しましてと申上げて、御満足はなさらぬ。夫れで我々が聖人を以て、えらい方であると仰ぐよりも、そこをば各自に引きあて、頂いた方を聖人は、どれほど御喜びになるかわからぬ。我々にしてもそうである。自分で非常に罪惡であると感じて居る時には、たとへ人がいかほど善いといふて呉れても決して善い感じのするものではない。唯讚歎して言へば言ふ迄である。併し聖人の御示しなされ處は、即ち我々の心の實状なのである。我々がどれ程講話をさし、亦如何程説法をしたにしても、やはり人間は他造人間である。心の實状に至つては舊にかはらず、どこ迄も淺間しい。夫れであるから、自分は實に淺間しいものであるとの自覺を生じた方が、却て聖人の御本意に叶ふのである。そうなつて始めて愚禿の初めの文が生きて来る。眞に聖人の信仰には、どこに一點の欠けめがない。御互に先づ自分の上に考へるのが一番早い。我等は實に戒律一つたもつことの出來ぬ淺間しい身の上なのである。前にも謂つたが聖人は、「まことにしんぬ、悲しき哉愚禿戀、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ること喜ばず、眞證の證に近づく事を快しせず、耻づべし痛むべし」と歎げかれた。まことに沈痛骨に徹するの懺悔である。御慈悲は頂いて居ながらも、夫を難有いと思ふこ

とを知らぬ、急ぐに浄土へ生まるゝ身と定めて頂きながら、夫を喜ぶことを知らぬのである。夫れ故内愚にして外賢なのである。聖人の御意では寧ろ外賢の方に充分の力かこもつてあるのである。小慈小悲もなき身にて、有情利益はあもふまじ、如來の願船にまさずば、苦海をいかてかわたるべき。こゝ迄行けば實にえらい(またうっかり讚歎して仕舞ふからいかぬ)。本來我々には人の事など彼是れいふべき資格はないのである。小慈小悲の一つさへない淺間しき身の上ではないか。さういふ切つて仕舞はれたのである。善導大師の散善義には、「たとひ身心を苦勵して日夜十二時急にもとめ急になして頭燃をはらふが如くするもすべて雜毒の善となづく」といふてある。さりながら悲しい哉、我々はこの雜毒の善がてきないのである。雜毒の善でも出來たら夫れは實にえらい。處が我々は貪瞋邪偽奸詐百端をば、先づ先決問題として置いて夫れだから我々は出來ぬとこへ力を加はへて来る。親鸞聖人はさうではない、始めの方へ力がはいつて居る。たとへ自力でもよいから、善が出來るならば非常にえらい。けれども自分は悲哉それすら出來ないのであると、こゝへ力がはいつてある。我々はその逆まで、だからといふ處へ力を措いて居る。蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、如來の廻向をたのまては、无慚无愧にてはてぞせん。蛇蝎奸詐の心と氣づいたは、即ち如來廻向の御恩である。若し如來の御廻向がないならば我々は無慚无愧にて了るより外ないのである。さて只今御話したのは最初の四五首であるが、述懐和讃は猶ほこの外に澤山ある。さりながら何れも人に向つて謂

はれたのではない。皆自分を御歎きなされたものばかりである。けれども中に少しは人に對しての仰せもないではない。例へば「五濁増のしるしには、この世の道俗ことごとく、外儀は佛敎のすがたにて、内心外道を歸敬せり。」の如きそれである。聖人は何を言はれても皆絶對的だ。この語の如き實に強い。外面には皆んなが佛敎を装ふて居るが、當時の奴は悉く外道だとの仰せである。當時は御承知の通り、南都北嶺に随分由々しき學生達が澤山に居られた。何れも外面佛敎を説いてさも殊勝氣な風をして居らるゝ。併し一度聖人の眼に入つては一文の價値もない。皆一帯の外道と映じたのである。今日でも眞如とか、哲學とかを彼是れ謂つて居る人達は、聖人から外道と呼ばれても仕方がない。又いつの間にか自分の得手が出て來た。これだから我々は駄目である。斯の如く悲歎として味はへば、何もかも皆わかるのである。愚禿鈔もわかる、外に賢善精進の相を現することをぬざれもわかる。「雜毒の善」も何もかも凡て頂ただけるのである。何れも人の上でない、自分の事を告白せられたのであつた。「淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、この如き、一應考へただけでは理に合はぬ。けれども悲歎懺悔であるから、かくありてこそ難有いのである。懺悔を謂へば、どれ程皮をむいても、皮は盡きない、如何程地面を掘つても、やつぱり地面は地面である。そこを聖人は「如何にして見ても地面である」と捨てられずして、何處迄も歎げいて御出になる。ろうして頭を廻くらはしては、かゝる者を救ひ玉ふが佛の御力であると絶對の喜びに出て居られるのである。其の歡喜の極に至

つたのか、即ち先き程申した「大願海のうちには、智恵つ波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり」已下九首の帖外和讃である。夫れ故帖外の方は悲歎述懐の正反體で、極端の慈悲ばかりになつてある。超世の悲願さしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はからはらねど、心は淨土にすみあそぶ」など眞に此の世からの極樂、絶對の安心である。嘗ても申したが、この御和讃は信州松代の本誓寺なる御往生三日前の御尊像の上に御書となされてある。今は焼けて唯其の寫しのみしか無いが、私は行つて拜見した。始めに「設我得佛十方衆生」の御文があつて、夫から今の「超世の悲願」の和讃、尙ほ御自作の御歌「病みし子をのこして歸る旅の空、心はあとにのこりこそすれ」といふ一首を御書になつてある。さうして終りの方へ「愚禿親鸞法臘八十一歳」としてある。これで見ても晩年の御心持ちがよく伺へて、心は淨土にすみあそぶ」と此世からなる極樂の御様子があり、見ゆる様だ。聖人は晩年になればなる程御悲嘆のふかくなつてあると共に彌々佛と同體になつて増々喜んで御出になるのである。之を要するに、聖人をば我々が「いらい方である、我々はとでも及ばぬ」と讚歎するよりも、各自に引きあて、同一の味ひを味はせて頂くのが肝要なのである。聖人はえらい大宗敎家であると如何程讚しあげた處が聖人はちつとも御喜びにはならない。人の善惡には係はらず、唯佛慈の偉大なるを喜ぶのが、即ち聖人の御本意である。今日は愚禿の語に就て少し味はせて頂かうと思つて、如斯き御話をしました。

どうも、聖人の事を伺ふに、先程から申した如く御師匠の法然上人と形を合はせやうとする氣が少しもない。法然上人に就てのみならず釋尊に對しても亦さうである。古來の聖者は皆内ち賢であるが、自分は内ち愚である、實に悲しい事であると言つて御出になる。聖人の愚禿と呼ばれたのを以て、今日の愚何々といふが如き雅號と混同してはならぬ。聖人は眞の意味に於ける天真爛漫である。聖人だからとてやはり腹を立てられたのである。それに就ては、随分ひどいやり方も見えぬでもない。末燈鈔を見れば「善乗房は親をのり善信をやらしくそしり候しかば、ちかづきむつまじくおもひ候はてちかつけず候」といふて御弟子の一人を遠けて御仕舞なされてある。随分ひどい仕方はあるが、聖人の御心持ちは凭うである。即ち「惡を好む人にも近づきなんとすることは淨土に參りてのち、衆生利益に歸りてこそさやうの罪人にも親しみ近づくことは候へ、夫も吾が計ひにはあらず彌陀の誓ひによりて御助けによりてこそ思ふさまの振舞も候はんずれ」末燈鈔といふ御考へである。かくの如く聖人は唯有の儘をやつて御出になる。即ち眞の意味での赤裸々である。我々の赤裸々は赤裸々を飾りにして居るのだからいかぬ。我々は、どうして、みち飾りを離ることが出来ぬ。惡人であるといふては、忽ちに飾る思をなし、煩悶したといふては、其煩悶をかざりにして居るのである。今日の話でも、ヤツ、バリ聖人を高い處へ上げてしまつた。何とも仕方ないが吾々である。よく思へば思ふ程、自分の欠點が彌々知れて來て難有い。話が大層無秩序になりましたから、定めて聞取りにくい事であつたらうと

以來、凡聖修する所の雜修雜善の川水を轉じ、逆誘闡提恆沙無明の海水を轉じて本願大悲智慧眞實恆沙萬德の大寶海水と成る、之を海の如しと喩ふるなり、良知りぬ經に説いて煩惱の水解けて功德の水となるが如し、願海は二乘雜善の中下の屍骸を宿さず、如何に況や人天の虛假邪僞の善業雜毒雜善の屍骸を宿さんや、故に大本に曰く聲聞或は菩薩能く聖心を究むる事なし、譬へば生れてより宣しむる者の行きて人を開導せんと欲するが如し、如來の智慧海は深廣にして涯底なし二乘の惻る所に非ず、唯佛のみ獨り明かにさとり玉へり。如斯海に關する解釋が實に懇切である。此次に直ぐに又淨土論の文を引いて海の講釋をせられてある。それは次に述へますが、此處の終りの處は大經の文にある通りである。大經には「如來智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の惻る處に非ず唯佛のみ明了なり」とあります。是等の文は氣かつかずに讀むて居れば左様でもないが、能く味へば實に深い味がある。人生上の事に於て人か種々と考へてやつた事でも、多く間違か出來たり失敗か起つたりするのは、何の點からかといへば到底人力の及ぶ能はざる涯底なき窮極なき點まで己か力を入れて、斯くならざるべからずかくあるべし杯と種々と我が計らひを交へるからいかぬ。大なる佛陀の智慧海は人力を以ては獨り今日のみならず、盡未來際到底人間の理屈や道理で研究せらるゝものではない。然し唯吾人は如來の大なる慈悲、大なる智慧を信じさへすれば、たとひ人智は及はずとも人力は適はずとも、自ら行くべき處にやつて貰へるのである。唯不思議と信じつる上はとかくの御はからひあるべからず候。往

考へる。幾度御話しても、とても充分に言ふことが出来ぬ。しかし先づ如斯くして歩々近づかせて貰ふより外はない。如斯くしてなど謂つて居るのが、はや駄目である。我々は聖人が「御代官」と仰せられたをきいては、直ぐに聖人はえらいなどと思ふ。けれども聖人が之を御知りになつたらば「そんな妙な處に力瘤を入れては居らぬ。そんな事おいて呉れ」と仰せらるゝにちがいない。如何程申しても限りがないから、今日はこれで仕舞います」

海の譬喩

(第二求道會講話)

近角 常觀

先日來、親の一周忌を營む爲に歸國致して居りまして不得止講義を休みました。今日は海の譬喩といふ題を出して置きました。御存知でもありませんが親鸞聖人の著書を拜讀すると或は本願海、或は智慧海等と海の譬を用ひらるゝ事が多い。これは親鸞聖人が自己の信仰の上から佛の慈悲、佛の智慧、佛の境界を表はすには此海といふ語が最も適切であるといふ處から屢用ひられたものと見える。私も此譬が味があると思ひましたから此題を出したのであります。

先其著しき例を出して見ますと教行信證の行の卷の終の處に、「敬て一切往生人に白さく、弘誓一乘海とは無碍無邊最勝深妙不可説不可禰不可思議の至徳を成就し玉へり、何を以ての故に誓願不思議なるが故なり」。又曰く「海と言ふは久遠よ

生の業は私のはからひはあるまじく候。佛陀の清く大なる海を味へば人生の事柄はさのみ苦痛でなく平穩に過さして貰ふ事か出來ます。次に淨土論にはどうあるかといふと、佛の本願力をみるなはずに、遇て空く過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を満足せしむ」。親鸞聖人は此海の譬喩を解釋せらるゝのに彼の曇鸞和尚に據られてある。前の淨土論の語を引用せられた次にかういふてある。又曰く「海とは言ふ心は佛の一切種智は、深廣にして涯なし、二乘雜善の中下の屍骸を宿さず、之を海の如しと喩ふ、是故に天人不動の衆、清淨の智海より生ずといへり」。前に申上げた海の解釋も略同し事である。實に海といふものはあらゆるものを併呑して更に拒まない、如何なる逆惡誘法の者でも、虛假邪僞の者でも等しく此本願は大悲智慧眞實恆沙萬德の満足せる大海の中へ注ぎこまれば、皆悉く平等一味となる。經文にある如く、佛の廣大なる御慈悲に遇へば、煩惱の水は自ら解けて功德の水となるのである。此他海といふ譬は澤山に用ひられてある。是迄は本願海とか智慧海とかいふ様に佛の悟の方を顯はされた例であつたか、又生死の苦海等といつて迷の境界を顯はす方の譬へも用ひられてある。要するに親鸞聖人の海の譬は本願力に喩へられたのが殊に味が多い様である。これから考へると或は私の辭案かも知れぬが、斯程多く海の譬を引かれたのは何うも親鸞聖人の實験から來ているのらしい。彼の親鸞聖人が卅五歳の時流罪にあひ給ひ、遂に北海を涉りて子多の濱へ御上陸なされた。處か此地方には元來宗教心かなかつた。そこで親鸞聖人は子多の濱にある子多明神へ詣てられて一首の歌を

詠まれた。「末遠く法を守らせ子多の神、彌陀と衆生のあらんかきりは」。此歌の如きは一見左程にもないが能く味へば此歌の大なる思想は恰も渺望際限なき大海の思想か能く表はれて居る様である。又御臨末の御書の中に「我歳はまゝりて安養淨土に還歸すと雖も、和歌の浦の片雄浪のよせかけ、歸らんに同じ、一人居て喜は、二人と思ふへし、二人寄て喜は、三人と思ふへし、其一人は親鸞なり、我なくと法は盡きまじ和歌の浦、あをくさ人のあらんかきりは」。此書又充分によく海の思想か表はれて居る。

それから其地方に草庵を結んで三年か間教化を施された處が誰一人佛を信するものがないので、如何にも残念に感ぜられたものと見えて又歌を御作りになつた。「此里に親の死したる子はなきか御法の風になびく人なし」。兎に角越後地方を行化の時には度々北海の風色に接せられ、其壯觀を眺られてからといふものは一層海といふ思想を得られたものではなからうか。それから和讃の中に出てある海の譬を二三申て見ましよう。和讃の中にも其例は澤山ある。先づ、本願力にあひぬれば空しくする人をなき、功德の寶海みち／＼煩悩の濁水へだてなし。「十方衆生のためにとて如來の法藏あつめて予本願弘誓に歸せしむる大心海を歸命せよ」。罪障功德の體となるこぼりと水のごとくにてこぼりおぼきにみつおぼしきはりおぼきに徳れほし。「名號不思議の海水は逆謗の屍骸もと、まらず衆惡の萬川歸しぬれば功德のうしほに一味なり」。盡十方無碍光の大悲大願の海水に煩惱の衆流踏しぬれば智慧のうしほに一味なり。又正像末和讃には、彌陀の智願海水に

差別のみに陥りて、甚しい時は信仰といふ事までも彼は眞であるこれは何である杯といふて居るか、無差別絶對の大願海に對して愧ち入る次第である。然し斯くの如くにして我等は幸に佛陀の大なる願海を迎きては漸く自己の小なる事を感じさせて頂くのであります。佛陀の大悲を感ずるのと罪惡の感しとは常に正比例をして行くのであります。親鸞聖人に於ても明に此事實を見る事が出来る。即度々申す帖外和讃と述懐和讃とは最も能く此事實を顯はされてある。例へば帖外和讃に於て、「超世の悲願さしよりわれらは生死の凡夫かは有漏の穢身はかわらぬど心は淨土に住みあそぶ」と仰せられしより見れば恰も凡夫でないといふが如き感があるけれども、翻て述懐和讃を見れば「淨土眞宗に歸すれども眞實の心は有りがたし虚假不實の我身にて清淨の心も更になし」と極端に罪惡の塊りであるといはれてある。この處は能く味はして貰ひ度い。

此度私が歸國を致しました御土産として諸君に一つの御話を致しました。それは外てはない、つい近頃即本月の五日に逝くなれた播州の後藤祐護老師に就ての話である。老師は實に有名な念佛者であつて、大分以前に物故くなられた彼の有高い七里恒順師を除いては、先づ此老師でありましたらう。性質は極潔白であつた殊に佛祖崇敬の念の厚い事は非常なものであつた、聞く處によれば御堂を掃除する爲に十二通の塵拂を常に使用せられたといふ事である。佛祖に對する事恰も生ける人に對する如くせられ、夏になると御堂をすつかり開け放して風を入れられたさうである。老師は又格別の念佛者

他力の信水いりぬれば眞實報土のならひにて煩惱菩提一味なり。彌陀智願の廣海に凡夫善惡の心水も歸入しぬればすなはちに大悲心と轉ずなる。其他生死海といふ如く迷の方を海に譬へたのも少なくない。例へば、「生死の苦界ほとりなしひさしく沈める我等をば彌陀弘誓の舟のみぞのせて必ずわたしける」。無明長夜の燈炬なり智眼くらしとかなしむな生死大海の船筏なり罪障をもしとなげかさね。尙此外群生海とか無明海とか種々に用ひられてある。前にも申した如く親鸞聖人の海の喩は、美しい方にも悪い方にも用ひられた。兎に角海といふは絶對の味を味はして貰ふには最適切な譬である。又親鸞聖人眞如一實の功德大寶海といふ事をいはれた。これは佛の境界即涅槃の境を示されたのである。此悟の境界より法藏菩薩は顯はれ給ひしものであつて、我等は此佛を信する故に我等の信心を又眞如一實の信心と仰せられたのである。吾人が死後に於て證すべき悟の境界は此功德大寶海である。又我等が平常稱ふる名號も亦此境界より出てたものであるから、名號の事を又功德大寶海の名號とも申すのであります。最後に海の譬について最も味のあるのは彼の帖外和讃の中の、「大願海の中には智愚の波こそなかりけれ弘誓の船に乗りぬれば大悲の風にまかせたり」。此和讃であります。無始より此かた造り重ねたる罪を其まゝ佛にまかせてしまふのである。實に海といふものは清水か來ようか別に喜ひもせぬ、さればとて如何なる濁水か來たかといふて決して厭ひもせぬ、其他何か流れ込まうが更にかまはない。それと同じく大なる彌陀の大願海中には毫も善惡智愚の差別はない。然るに吾人は常に

である。全體他力の念佛者は兎角善に陥り安いが、老師に成りてはそんな様子は毫頭ない。老師が念佛を稱へらる、時には常に珠數を繰られたがそれも必ず袖の中で繰られた。然らば何時頃から其様に念佛を稱へられる様になつたかといふと、明治十七年十一月二十七日の晩から、初めて稱へられた晩の如きは六千遍、其翌日に至りては已に三万遍、爾來今日に至る迄日々殆んど六万遍の念佛を稱へられたさうで、初めの中は珠數を繰る事の烈かりし爲大層指が傷んだといふのである。此老師が嘗て宗教法案騒の時に態々上京せられ、錦輝館に於て大演説を試みられた事がある。老師又社會事業の爲には少しも盡力を惜まれなかつた。宗教法案の時には餘り多忙であつた爲に、老師も意の如く念佛を稱へられなかつたさうであるが、然し今後は取り返して一日六万遍にしたいと言はれた。頗る眞面目な人であつて時に怒らるゝ事がないてもなかつた。老師の生涯は先づ斯くの如くであつた。私も老師が生前に親しく會うて有難い話を承た事もある。私は此度老師の病痾を聞くや直ぐに見舞状を差出しましたが、早速其御子の葆眞氏より町重なる返答書が参りました。其書は殊に老師が臨終の様子を向ふ事が出来ずから一應讀むて御覽に入れましよう。

(前文略) 祖父は明治三十五年仲秋以後胃腸に疾症を感じ爾來漸を追ふて衰羸を來し客冬來は、病勢倍進行して目下は唯流動的の食事少量づゝにて固形的の餐は少も消す働之無脈膊は九十より百二十の間を昇降しもはや餘命は指を折る迄もなき程に切迫申居候、然とも心機は鐵鑢として壯快に

て先日來日々兩三人づゝ門信徒の重なるものゝみを召て切に亡後の遺誠を垂れ亦寺内は度々枕頭に鳩めて警訓を施し已に新淨の黒髮黒衣各一白衣一之を調へて出立の準備もなして、極惡深重無他方便唯稱彌陀得生極樂、の眞文を玩索して專念稱號をいたしつゝ、願生西方の宿願を果させ頂くといへるに餘念無之候。云、

私今以て此書を拜見し更に深く感ずるのであります。尙私は先日歸國中に私の隣村の人で深く老師に歸依し毎年兩三ヶ月間も同師の下に趣いて法話を聞かれたる人より老師の臨終の當時の話を聞きまして深く感じました。これを御話致して見ようと思つた。これか私今回の歸國の聊の御土産であります。そこで已に前の手紙にある事は省いて其他の事丈を御話致しましょう。老師かいはるゝには我は祐秀といふ立派な親を持ち又葆真といふ立派な後繼者を得たのに、竊に己が一代を觀みると實に愧かしい、長い間立派な顔をして過して来たか何一とつ爲た事はない、それに少し計り學問をした爲に人から學者といはれ己れも亦學者顔をした事もある、噫長い間人をいつはつて遂に一代を過したが、何うか皆後代の人を助けて行てくれといはれたさうである、實に感ずる言葉である。又老師か常々申された和讃は、彌陀大悲の誓願を深く信せん人はみなねてもさめても隔てなく南無阿彌陀佛を稱ふへし、といふのであつたさうですが、臨終の折は書面の中にもあつた彼の源信和尚の極惡深重無他方便唯稱彌陀得生極樂の文を引いて、我等の如き極惡の衆生は唯念佛より外には助かる道はない、誠に沙彌教信の如き人は乞食の様な者となつ

しょう。時貞觀八年八月十五日夜勝如空に音樂を聞く、之を奇み思ふ間に人柴門を叩く、唯咳聲を以て人ありと知らしむ。戸外の人陳て曰く我は是播磨國賀古郡賀古驛北邊に居住せる沙彌教信なり今極樂に往生するの時なり、上人は明年の今月今夜其迎を得べし、此由を告げんが爲の故に以て來れるなり。然る間微光僅に菴に入りて細樂漸く西に去る。勝如驚愕して明且僧の勝鑑を遣して彼の處を尋ねしむ、勝鑑晝夜を論ぜず彼國に發向す、往還の人に對する毎に教信が往生の事を問ふ。敢て答ふるものなし稍彼の賀古の驛の北を見れば、小廬あり其廬の上に當りて、鴟鳥集り翔る、漸近き見れば群狗の競んで死人を食ふ。傍に大石の上に新なる髑髏あり、容顏存せず眼口咲めるに似たり香氣熏覆す、又廬内を臨めば一老嫗一童子の相哀哭するあり便ち悲情を問ふ。嫗曰く死人は是我夫沙彌教信なり。去十五夜已に死去す、今三日に成れり一生の間彌陀の號を稱し晝夜に休まず、以て己が業となす。之を雇ひ用ふるもの呼て阿彌陀丸と爲す、是を日を送る計と爲し已に三十年を経たり是童は即ち子なり。今母と子と共に其便を失て爲す方を知らず、是に於て村里の男女往還の道俗具に勝鑑の來れを由を聞いて星の如く馳せ雲の如くに集り、彼の髑髏を回りに歌唄讚歎す云云。此話を思ひ出して後藤老師が死に臨むに特に教信の事をいつて懺悔をせられたのである。私は此度老師が臨終の様子を聞いて愈深く老師が前に申した大願海の味を味はれて居られた事を知りました。自己の罪惡を感ずれば感ずる程益佛の偉大なる事を感しして頂く事が出来る。私は歸國以前已に此意味の事を親鸞聖人の帖外和讃と悲歎懷和讃とを相對比して御話申して居りましたが、此度は親しく生きたる實例を聞いて一層深く感じさせて貰ひましたから重ねて申上げたのであります。

て念佛せられた、念佛は眞に有難い、念佛は稱へる迄は然うもないが先づやつて見よ其味は津々として盡きぬ、其代り一旦初めたら決して止めるな、若し止めれば鐵の山を齒てくひ破るより難いそよといはれたさうである。一々味ふへき言葉であると思ふ。これはつまり酒や煙草を止めるのと同じ事、先づ止めた先きの苦を思ふと中々止められないか、思ひ切て止めて見れば何でもないのと同じ事であると思はれる。斯くの如く唯老師の述懐計り聞いて居るとわからぬが、老師か一代の間教化に盡瘁せられた事は、元來此奔には青年の會合のみが月に十回もあつたのを見ても知られる。それから沙彌教信の話は永觀律師の往生十因といふ書物の中に、念佛者か淨土に往生する證據として擧げられてあるの、實に味ふべき話である。此話は私も幼少の時より父から聞かされて居りました。全軀私等は餘り念佛を稱へる事か出來ない方でありませうか、斯様な話を聞きましては眞に愧ち入る次第であります。此永觀律師といふのは今より凡そ八百年程前の人で幼少の時より出家して諸宗の學問をなし十八歳の時全く念佛三昧の門に歸せられた。さて教信の話といふのは何ういふのであるかといふと、教信はもと南都興福寺の英傑で中々の學者であつたか、後大に厭世心を起し深く念佛門を信じ、遂に南都を去て播州賀古郡西野口に至り茲に乞食の如き風をして専ら念佛をして居られた。其死なれた時の有様か、此書の中に委しく書いてある。そこで此教信といふ人に念佛を勤められて立派な人となられた勝如といふ人かあつて、此人か或時空中に音樂を聞かれた、これから書物を讀むて見ま

實 驗

身を治して後、心に及ぶ

求道學者聽講者中一人の老嫗宇野氏あり。一日さゝやかなる根津の寓居を訪ひ、其直話を筆記す。老嫗今や悲境に沈淪し、辛苦の間佛恩を喜ぶ。語る所に佛願の極はまりなきを覺たり。

十七八の時迄は現世を祈りまして不動様や觀音様を拜んで居りました。二十五の時縁附きました。生家も縁先も眞宗ではござりますが誹る人ばつかして、馬鹿くしい爺さん婆さんの宗旨だなど申しますのに化せられまして其んな心持に成つて居りました。片附きました一年程は何ともございせんてしたが其内に子供が生れました。まあ夫の事を申しますのはいけません、非常の強酒家て無理の事ばかり申されまして。一人の時には里へ逃げて來た事も度々ありましたが、其内に子が二人になります中々さういふ譯には行きませぬ。子の愛情に引かされ辛捧して居りましたが、夫の邪見は益盛になりませぬ。何ういふ性質でございますか御酒がすぎますと神佛にさはります。御神酒徳利をひつくり反しなどいたしまして何か一言いふと非常にいぢめます。或時非常の無理を言ひますので心外でなりませぬので、其時は私も悪うございまして夫のいふ事ばかり聞きませぬ。毎日の事御近所の仲裁に來て下さる事が常住でござりました。其時は自分が悪いと

は思ひませず自分ばかり善いと思ひますから。或時非常に責められましたので、離縁を願ひました。許してくれませぬ。さればとて大人しくはしてくれませぬ。凝つとして居りますと宛然眼を打ちまして長らく睨みました。又擲り仆されて氣絶した事もあります。まあ御話にはなりません。離縁を取りたいとて出来ず、居れば苦しまねばならず。又親類も辛棒せよと申しますし、親に心配掛けるもすみませぬ、もう免るゝ道は無いと思ひまして幾度か死を決しました。つゝらぬ根性を出しまして、御耻しい譯ですが全く死ぬ氣になりました。寝静まつた頃親子の後の事を書置きまして死ぬる覺悟になりました。夜の十二時頃火鉢の前につくねんとして居りまして、そして御内佛に御燈明を上げましてな、如來様へ御禮を勤めましてから、火鉢に倚つて居りますと眠くなつて現の心地になつてしまふと、御佛壇から白衣の人が出て來ました。あの人は何か知らんと思ひました。白い装束して何處へ行く人かと思つて居りますと、其人が傍へ來ますので逃げ出しますと襟がみを捕まへますからホヤリと思ひまして、引きづられて御内佛の中へ引込まれましてドサンとそこへ尻もちをつく心地になりますと、花瓶や御香がひつくり反り、はつと思つて氣が附きますと矢張火鉢の所へ座つて居りました。死ぬといふ事はいかぬ如來の御助けと思ひまして死ぬる事は悪いと思ひ止りまして、何事も辛棒せねばと思ひました。此時少し心も折れました未來をあゝこうと云ふ事も御さいませんが、只我が少し折れたのでござります。

そちこちする内に子供が生れました。御腹に有るときから

と申しますとそれなら又明日來いと云ふので歸りました。いやになつたのが不思議です。ふいと心が變りましていやなら善いから又明日いらつしやいと云ひますからね、癒らぬと見込が附きましたから死ぬ覺悟でござりました。随分苦しみましたどつと枕も上らず臥り切りになりました。段々重りまして、臥せろと思ひしても誰か搖するやうで身體が飛上つてねられませぬ實に業病でござります。醫者も分りませぬ只神經だらう位に云ひます。醫者にさう云はれましたから心の内の煩悶、それも宜しうござります死ぬといふです。未來の心配があります。日頃聽きましたから未來が苦になりまして、こゝに居られぬと思ひますと未來が氣になりましてな、そればかり考へて御和讃を戴き御文章を戴きましても未來に安心が附きませぬ、連れ合は佛法嫌ひ南無と聞いても胸が悪いと申しまして御内佛が御ありませぬ阿彌陀様もありませんが一飯も供へませぬ手を合す所ではない通るのも胸が悪い位にいひましてな、念佛一つ大きな聲でやりますと大變で、手足も利かず臥せつて居りますものを虐待いたします。御話するもちかしいですが食物も封じて食はせませぬ。人は天理教やキリスト教をすゝめます。此は屹度癒るから信心せよと申しまして心は引かれませぬ。九て二河白道の譬の通りでござりました。こゝで何を見ても涙の種です子供がね母さんお薬をといふのを見ても何を見ても悲しうなりまして、只心に浮ぶのは日頃の罪惡でございまして、今死にましたら地獄より外行き所が無い、大變の事を爲たと思ひまして此世が地獄の苦でございまして、永劫苦しまねばならぬと思ひまし

家庭が悪うございましてから弱いので、又夫とは矢張衝突して居りまするし悪い時に、此子も出なかつたらばと思ひまして又逃げられもせぬと思ひまして、悪い心にはこの子が死んで呉れ、ばなど、思ひました。七十日程立ちますと風を引いたやうで、こゝへ行かんと愛情で、早く直したいと思ひ醫者へ連れて參りますと腦膜炎で一日も持たぬと申します。これはと思つて宅へつれて來ると程無く亡くなりました。其時には自分て手を出して殺したと思ひましてな、悪い事をした手後れしたのは自分て殺したに違ひないと思ひまして其事ばかり氣になつて居りました。御近所に御座が立ちます所がありましたから御詣りに行けといふ人が有りまして行きました。此が御法の聞き始めてした。結構の事と思つて難有きかれて居りましたか、家業も忙しく奉公人も大勢使つて居りましたから參詣も思ふ様出來ず暇もございませぬでした。

其内にふと病氣になりました。ふとした事でございましてがね手の拇を一寸切りますと兩手の拇と足の拇が痛み出し、段々はれて來ますので大學で見て貰ひますと脱疽だと申しますので驚きました。手足を切る位なら死ぬ方が善いと思つて居りますと後にさうで無い神經だと申します。兩手兩足の痛が身體へ廻りまして、其苦は御話には成りませぬ。そう痛むなら手を切つてやらうと申されますので、切つて貰う積で教室へ參りますと先生が仕度をして書生さんがずつと並んで、さあ臥なさいと云ふので魔藥を掛ける斗りになりました。此時ずつと皆さんが並ぶと不意と厭になりました。全く切る積であつたのだが厭になりました。今日は氣分が悪いから

て、信者を頼む事も出來ず自力で御念佛をして居りました。只ね念佛一三味でござりました。これより外仕方が無い念佛唱へて死ぬと思ひまして、夜晝休まず目も明けず唱へづめに唱へて居りました。唱へて居りますと其時夜分二時頃とも思ひます。臥りはしませぬウツ／＼としてますと二時頃と思ひます。一寸西の方に頭を向けて居りますと室の中が急にキラ／＼と光ります。はてなと存じました。不思議の事、ランプを持つて誰か部屋に來るかと思ふとそれもなし。矢をつくやうにお光りが何でござります私の周圍を照されたでござります。からだ全體を包まれて、不思議の事があると思つて不思議不思議と思つて居りました。それのみでござりました不思議なのが心中何だつたらう何だつたらうと思ふ外、愚かでしたから氣附きせんすな。漸々からだの痛みが軽くなりまして薬も飲まずほつて置きました。一日一日にからだの痛が去りますと同時に、足が利きます手が利きます。自然に御飯も一人で戴けます後へ手をまはして帯も結べます。嬉しさ其嬉しさはどの位でせう實に嬉しいと思つて居りました。自然に痛が去りまして手足も利き元の身體にちよんとなりまして。其時驚が立ちましてね懈怠を改めて御法を聞かなくてはと思ひまして、やつと歩行くやうになりましたから、夫には灸を据えると申しまして別院へ毎日參りました。夏の災天で苦しうございまして御坊へ參りまして誰彼となく御法をさゝました。長らく苦しき苦しき何やら物足らぬ心が起りまして、如來のお慈悲は難有いと申しまして臨終を取結めますと、

さびが悪くなりましてふと成時は往生出来ると思ひまし
と、又懈怠になり又余り悪い心か起るとこれと思ひ悪いの
を其ま、お助けとは思ひながらどうも何でございまして。其
れからふと懇意の方が求道學舎へ行かぬかと申されました
が、私のやうの無學の者には分るまいと思ひましたが、まあ
聞きませうと伺ひました。先生がお出てになりました、一旦聽
いて居りますから御言葉が堅うござりますが味か取れまして
ね、段々御伺申上まして皆様の御實験を伺ひまして、私もあ
いふ経過をへたともう御慈悲が骨身に透りまして、五十四
年のあとを振り返りますと何一つ如來の御導きで無い事はない
と初めて感ぜられましたね。彼の時あの御光明をいたゞきま
したのも如來様の御手廻し、病氣もお催促と一々胸に感ぜら
れました、年の行かぬ時からの事をずつと考へますと、如來
様の御手廻しが知られましてな。今迄如來様と離れて居りまし
たが他人と思ひましたが、知らぬ先から一人を信仰させやう
ための御手引と思ひまして、如來様の御指圖と思ひますと心
ありだけ如來様にお任せ致しましたから、只今でも暮しも樂
てもありませぬかぐつと樂になりました。今迄は安心したや
うの安心しませんでした事か起ると騒ぎ出します。病氣すると又
死ぬかとキビが悪く思ひましたが、只今は皆な如來様へ御あ
づけ致しました。只今も悪い心不實の心も起りまして此心で
はと思ひます。斯ういふ心では、慚愧の外はござりません。
其一心不亂の時には苦しい御念佛でござりましたが、この時
お念佛の結果で御授けになりましたが矢張りしぶとい奴でこ
ざりますから、お念佛が大儀になります但其慚愧と歡喜の時

にお念佛の心か起ります。事に觸れますと御慈悲がありたれ
ば見る影も無い者が娑婆を出る事が出来ると嬉しく、又其
時は御念佛が出来ます。其間には大儀で先生も此間の御話し
に念佛何萬唱ふるといふ御方があるのに懈怠勝てござります
横着てござります、御念佛は唯一の御報謝ですが樂になると
直く忘れます。よく考へますと此世ばかりの厄介ではない、
何と話さうて話せませぬ。中々口にも言葉にも出せませぬ。
自分の智慧では出来ません。自分のぬうちが知れましてね是
迄は自分ほどよい者は無いと思ひましたが、今は主人が氣の
毒になりましたね宅を出てから一年になります。がまあ追出さ
れましたのですな、能も無し財産も無し乞食でもと思ひまし
たよ。釋尊でさへ乞食なされましたのですからな。幸に乞食
も致しませんで生活も立つて行かれますからな、皆お他力で
ございますから自分の力ではござりません。只今では死後は
後れません。地獄も恐ろしくはありません。

願海無際。信山不動。
佛心所徹。特選恩寵。
此心安大。三千不重。
此道公明。十萬不難。
久在纏縛。群惑塗涌。
今日超證。萬福大總。

(小栗栖香頂師辭世)

靈蹟

五臺山探勝記

菊地 秀言

二十日四更眠を破て程に就く道路分て二條を拆く一路は龍
を開て墜と爲て以て車行に便ならしむ一路は石を疊て道を作
る河水滂溢すれば便ち僉な石路を行くと云宿雲漸く収て曙光
蒼藹たり前頭白龍の潜臥するか如きを視る是を琉璃河とす長
凡ろ八十間許、石欄彫装結構雅致なり河畔船舶輻湊す行くと
十里餘多く墜道を過て又一石橋を得たり長三十間琉璃河と相
埒す是を秬馬河と稱す時方に八時三十分涿州に入る復た一大
石橋を得たり中央は虹形にして前後皆平坦なり長凡三百間彫
刻巧妙、水濁り流微なり沿岸麥を種ふ蒼翠一色而して河堤楊
柳を植ふ綠烟鬱蒼たり既にして涿州城を過く黃帝の故都なり
城堞高二丈餘、長東西一里南北五里、商估來往漕運織か如し
蓋し繁華の小都會たり涿鹿驛と曰ふ城郭を出て路傍一大廟を
觀る丹壁長二町餘當時乾隆嘉慶二帝五臺山に巡狩の時に建て
行宮と爲せしもの如今改て藥王廟と爲すと云
行くこと七八里にして樓桑村を過く即ち漢の昭烈の故里にし
て帝の龍潛して鞋を此に賣る碑あり漢昭烈帝故里と大書す乃
ち蕪詩を得たり

赤帝深謀及遠孫。風雲一起會桃園。他年王業偏安恨。已
在龍潛賣履村。

傍に一小廟あり漢桓侯廟と題す僧の龕に坐して定に入り喜捨
を來往の客に請て此廟を修理せんとするあり右旁には沙を積
て堤とす廣寛數里に亘る棗楊を列植す一古井あり相傳ふ是れ
張飛の故宅也と未だ然るや否やを知らず此を距る遠からず先
主廟あり過觀する能はざるを憾とす十時十五分松林店に抵て
午餐を喫す此地寶店を距る七十五里又は七十里
正午高北店を過く旅舎の可なるものあり路を田畦の小徑に
取る蓋し大道泥多く車を拉くに苦めはなり村落多くは楊棗を
栽培す彌望皆な麥畦なり綠雲渺漫年豐賀す可し行くと二十里
定興縣の城外を過く城壁高二丈許。前行數百武にして一碑あ
り燕昭王黃金臺と題す邈邈たる郊原一の觀るべきものなし此
間易水を渡る蕪詩を得たり

一諾千金斃而止。丈夫肝膽總皆丹。趙燕今之悲歌士。易水
蕭蕭似舊寒。

古史載る所ろの燕昭王易水に黃金臺を築きて天下の士を延く
所ろの舊跡なる歟未だ考證を得ず此地佳煤と良鐵とを出すと
云四時北河を渡る河狭く水綠なり蘆橋を架設す河堤皆な楊柳
を植ふ三四の漁舫繫て其陰に在り風趣嘉す可し街に入んとす
るに際し明の楊椒山の廟を觀る道光年間建る所ろ椒山名は繼
盛明の世宗の朝仕て兵部員外郎たり時に嚴嵩事を用て賄賂公
行し邪佞日に進む椒山齋沐すること三日乃ち上疏して嚴嵩の
十罪五奸を論し劄論切論、朝野を動かす竟に坐して絞罪に處
せらる刑に臨みて絶命の詩を賦す浩氣還太虛、丹心照千古、平

生未報恩、留作忠魂補、後に忠愍と追諡す義烈忠魂躍如とし
て今猶ほ生氣あるを覺ふ度んで其韻に歩す

恒山難比名節高。筆力巍然幾萬古。拋却形骸我事終。

忠魂留作君臣補。

此地人口三百餘、安肅縣に屬す太和店に泊す是より以西絶て
杭稻なし小民胥な小麥に依食す晝晚二餐は主として麪を喫し
其餘は率ね燒餅を點食す又羹を調理するに酸醋を用ふ初は嚙
吸に耐えずと雖も慣るに隨て漸く舌根に上すを待へし所謂飢
來塵飯亦如美の類歟此地淫風甚だ般んにして凡そ夕陽に至れ
は店中の小僕鼓を鳴して客の來るを報す夜に入て姪女闖入殆
んと阻格す可らず傳へ聞く良家の婦女率ね春を賣て糊口に資
すと俗風の類墮歎せざる可んや予は問顧方袍にして且つ五臺
に朝するを名として幸に崑崙を免れたり往時小栗栖香頂會て
此地に泊して瞑目念佛一女毎に一大錢を給して諭して去しむ
と云後游者の爲に特に之を記す此日晴天行くこと一百三十五
里又は一百二十里寒暑表七十三度

二十一日 四時程を發す行くこと三十五里固城鎮に抵る街
を距る數百歩にして廣漠なる郊野を過く石碑あり燕田光故里
と題す前路多寶塔を現す地塘頗る多し蘆荻を生す又田畦に水
麥を種ふ農夫轆轤を使用して汲汲焉として穿井中の水を灌漑
す其勞憫む可し九時安肅縣に抵る慶豐店に就て午餐を喫す城
大ならず記するに足るものなし此地白菜を出す味極て佳なり
と云寒暑表七十四度

十時程を發す許多の小橋を過く五六里毎に小村落あり行こと
十餘里にして草河を過く水碧に心深し街に入る頃、一大廟を

二十三日六時驢に騎て程を轉して西唐縣に向ふ此
より山路に入る數日間山又山の行路難なり四顧渺茫綠麥畦を
織る行こと三十五里一村を得たり郭村と曰ふ一廢寺あり觀音
寺と曰ふ然く頽廢僧の住する者なしと雖も境内寬濶にして殿
閣軒然たり三石碑あり廣州前任道、張桂楚の撰ふ所る左郭山
を望めは兀然隆起す峰頂に小廟あり一抹の青烟深く廟扉を鎖
す右郭山を望めは巍然突立して衆嶂の上に聳ふ極て壯觀なり
一詩を得たり

郭村四望幾層鬼。空翠無人滿院苔。一片雲留大悲閣。遊
方僧撫古碑一來。

行こと數里にして沙地を過く左に小山を現す半峰娘娘廟を建
つ會々開廟十五の日に屬す男女肩を駢へ歩する者騎する者道
路に絡驛たり此を過て間々廢廟を視る沿途多く浮圖を建つ十
時唐縣に抵て午餐を喫す城壁高一丈六尺許。南北袤一里、市
街蕭條たり方順橋を距る六十里驗溫儀八十六度

午時程に就く行こと二十五里渴甚し一村落を得たり村翁に請
て水を飲む清涼水の如し民情太た質朴なり行こと八里許左に
一河を現す沙路を経て復た山道を過く崎嶇極て難む五時大洋
店に抵る隆德老店に泊す人家三十餘戸山間清楚にして晚來涼
快幾んと終日の苦熱を忘る還た市中旅館の熱鬧不潔の比に非
ず而して深山幽谷運輸梗塞す爲に羹菜の調理に醬油なし皆な
土鹽を用ふ土鹽は山間の土中より採掘するもの形狀團塊黑砂
糖に似たり又魚肉なし希に雞卵あるのみ良煤を産出す此夜五
臺山菩薩頂王喇嘛なる者來訪して曰く蒙古大官を迎んとして
數日間此に在り而して未だ隻影を見ず是より以往山路險阻猛

觀る慈航寺と曰ふ丹壁四に周り殿堂雄壯なり四時保定府外を
迂回して西關義和店に泊す城壁高三丈周圍三十餘里北河を
距ること一百二十里土人の言に據れば官兵七千餘人新疆に
向て發すと予未だ輒く信せず會々街上儘ま派兵の告示を貼
附するを見る以て其虛ならざるを知る此時清魯事を新疆に
構ふ久ふして解けず幸に左宗棠の如き忠誠勇武なる宿將あり
て回復するを得たり派兵は蓋し此役に充るなり偶感一則を
賦す

黑龍吞盡噶新疆。跋扈鸚羅律虎狼。寄語東方須警誠。
齒寒固起自唇亡。

二十二日晴五時三十分程を起す二三里を隔る毎に小村落あ
り麥畦藹藹聚樹森森他に記すへきものなし午時方順に抵る利
順店に就て午餐を喫す適々土人の言を聞に五臺に上るに二
途あり一は又路を保定府より取る一は則ち又路を此地の西に
取ると孰れか是なるを識らず之を車廠に謀て車を雇て獲鹿縣
に到るの後將に又路に就んとす更に老實にして地理に熟知す
る者を索て之を質すに是の如くならば道遠きこと三百餘里且
其路上の險惡も亦た計る可らずと便ち車を捨て驢三頭を賃す
一は自ら之に騎し一は僕を騎せしめ一は旅中の用具を駄す
遲議時を移して斜陽西に眷く此に泊す人家二百戸晚來街衢を
徜徉して方順橋上に遊ふ旁に石碑あり架橋の事を記す筆力董
其昌の骨格を得たり橋に沿て池塘あり涼風徐るに來り群蛙鼓
吹す也た是れ旅中の一適なり一詩を得たり

晚來旅恨共誰消。吟策漫汗興趣饒。方順橋頭讀碑立。清風
斷續月前照。

獸出沒危險言ふ可らず予東導主と爲て師を送て借に往ん幸に
備るに駝駝あり唯菩薩頂自ら一定の成規あり幾許の布施を要
す師豈意無んや試に其額を言へと其意蓋し予を嗾して多少の
資糧を食るに在り輒はち謝して應せず巧言狡黠憎むへし一詩
を吟して自ら警む此日行こと一百里

日暮千崖淡。胡僧對我黏。行厨多咽辣。上膳試嘗鹽。令
色包茶苦。巧言裝齋甜。前途須用意。世味一層尖。

二十四日五時三十分程に就く行こと數里唐河を渡る土沙驢
脚を没して進み易からず磴巖摧驢の間を歷廻し復た數里にし
て十八渡河を渡る河流紆曲折過渡十餘回にして初て彼岸に
達す此稱を得る所以なり水淺く沙明かなり柳陰四五の漁家を
隱見す四望悉く岡巒廻繞して遠嶺は黛の如く近岩は媚を献す
驢馬遠く嘶て蕭蕭たり溪流清く響て潏潏たり風趣雅味濔恬掬
すへし蕪詩を得たり

曉風吹帽客程餘。遠嶺如迎近岳遮。水淺沙明魚意樂。綠
烟深罩兩三家。

山岸を宛轉して六ハ斯河を渡り十一時臺略村に抵る復益老店
に就て午餐を喫す人家三十戸曲陽縣に屬す縣治を距る一百二
十里大洋店を距る五十里

顧ふに五臺の山路に入て十日間の跋涉を爲す河流に架橋なく
又渡船なし必らず驢背を假るか又は徒涉を爲すかの二途に出
ざるを得ず

二時程を發す行こと二十里三ハ沙河を渡る複岡を過く路極て
崎嶇數里にして沙地平坦なり清泉巖石を嚙て流る右巖に小洞
を鑿開するあり土人曰く乾隆帝嘗て五臺に幸す此所に於て碑

を建て勝を記す左に求龍山あり山頂に龍王廟を建つ山上柏樹あり大さ百圍當時某皇此に登て樹を封し一字を創すと云五時王快鎮に抵る小城壁あり城外戯を唱ふ(我國の田(會芝居也)數百の男女娼集站立す熱鬧を極む信義店に泊す此地阜平縣に屬す人家二千戸義學二房あり

此の如く精細複雑にして終身役業に従事し幼少より八股體の時文を練習し經書の註疏を諳記し歲試に登第して秀才と爲り郷試に登第して舉人と爲り會試に登第して進士と爲る其舉場に入て文章を寫すや字體一畫を誤るときは落第たるを免れず故に支那人は草童より寫字を練習する方法極めて備る是れ同國人は概して文字を寫すことを善する所以なり然るに功名の一路は多く舉人に至て停滯して進士に登る者は極めて少く進士に登る者と雖も許多の閱歷を要す畢竟非常幸福の人に非るよりは鼎臺に列すること能はず而して其年齡を算すれば六十以上乃至七十に達せされは此間の進路を履歷すること難し典章を記應し世故に練達するの實は或は之あるへしと雖も腦底消滅して元氣振はず弊賢を改良して變通自強の道を講ずるは斷して不可也予故に曰く舉業の法を廢して人材を登庸し舊制の時務に適せざるものを改良して以て各國の良法を採用し自大妄漫の風を矯めて愛國僑義の道を養成せされは老大國の振起は期す可らずと會て詩を作り之を諷刺す

學弊千年積。斯書不如焚。草童習寫字。十五學時文。修飾練八股。註解諳典墳。秀才登鄉試。舉人半生勤。會試中三甲。得僅攀青雲。殿試上論策。固陋安足云。立志如是窄。元氣遂難振。終生徒役役。老朽無所聞。趨

にていかにしても醫藥の療治もつかずかゝる境遇なれば今日の文明の世には小學全科をも卒業することを得ず快々として益々人世の頼むに足らざるを知り殆んど絶望の涙に暮れたる厭世者となり了んぬア、今此可憐なる巡禮者が數年以前迄は心靈には間斷なき煩悶の病覺あり肉體には限りなき苦患の痼疾あり「ア、何の事ぞかくまで哀はれなる此の世にあらんより一日も早く一刻も早く他の苦しみなき世界に移住したき念は絶えず」それより私は遂に家を辭して或る山寺の小僧となりましたけれども何事も心身に病苦あれば叶はず遂に其寺院にも勤まらず又他の或家に奉公してみたれどもそれと同じく悲哀と苦痛とに満ちたれる我が身には遂に果されずして泣き／＼其家も斷り出てたりぬ斯る次第なれば今は唯大慈大悲の佛陀をたのみ只管宿世の惡因縁なりしことを悟り晨夕涙ながらに懺悔の文を唱へ後生は現に角先づ現在の此の世の今の心身の苦しみを救ひ下されと無理なる願ひをたてましたドモそればかりでは叶はず遂に斷然意を決し此の圖の通り一笠一杖てひとりなつかしき故山に別れを告げました時に明治三十四年春三月十五日夫れより誠には靈水萬里の孤客四國八十八ヶ所西國三十三ヶ所禮場残りなく願禮しそれより一度び故郷にかへりたるも再び又た出立し更らに諸國の山河を跋涉し幾多の神社佛閣靈所舊蹟を巡拜し今や幾内中國南海西海殆んど三十餘州の山野津々浦々に至るまで七寸の鞋を運びて僅に數千里の長程途を踏破しました今ては早や數年前の我が身ならず「山水」と唱ふる天興の名醫に就きては肉體の病苦を軽くし「佛教」と云へる無形の靈藥を頂いては心靈の病覺を退散いたしましたや、靈問晴れて折々は眞如の日光を仰ぐことが出来るやうになりました今ては何よりも「信仰」が第一番に樂母しく成ても覺めても佛陀の慈恩に感泣して寸刻忘るゝ暇はありませぬ申すまでもなく我々の如きものは實際の無錢旅行で或は野に山に或は病み或は倒れ食ふこともあり食はぬ時が多き被れて杖は磨しツマレは破れて穢かつき寄生蟲のお宿所となり乞食すれば日々巡査公に咎められ多くの人々よりは犬猫同様に冷遇せられて誠に大學校の博士様でも嘗つてためしなき程の想像も及ばぬ境遇でありますア、近角先生閣下も「信仰問題」の初頁に拜讀しました「佛教は實際の宗教である」との御言葉誠に私の境遇よりしてよく／＼思ひ當りましたあらゆる苦痛あらゆる悲哀と戦ひて遂に其苦痛悲哀に打ち勝つ無量の難關を出脱して遂に圓滿自在絶對無限の光明界に到達するは眞に是れ佛教の眞精神で安心立命境は此の處に於て決定せられ吾人が終極の大目的に向つて精進すべき

利無愛國。偷安不忠君。宜哉國勢盛。朝野日紛紛。自古事姑息。未嘗有奏勳。銳意改陋習。宜舉材拔群。致知且溫古。格物須徵新。變法自強計。定是在斷然。又官兵十三人駐留保定府を距る二百五十里定州を距る一百廿里曲陽を距る九十里傳へ聞く前年凶歉荐りに臻る馬賊煽起して良民を害するもの尠なからず會て喇嘛僧九十餘人を殺し此地の小民亦た害に遭ふ官兵捕て十三人を斬る鎮を距る三里に龍王廟あり今尙ほ夜に入は餘黨群聚天明に至て散す賊多くは唐及び曲陽の人也

巡禮者の書簡

拜啓願て一書を草し現在東方はるかに京都に御住りたまへる、近角常觀先生の御机下に送る未だ拜眉の光榮を得ざれども先生閣下か如何に御熱心なる御信仰を佛教に求めたまへることは巡禮者一夜先生閣下の御著作なる「信仰問題」を拜讀して實に無限無量の「ありかたない、こゝろもち」を感じました嗚呼近角先生あることか知る何んぞ遅かりしや此の可憐なる一笠一杖の巡禮者は偏へに近角先生の將來益々我々如き五濁罪障深き卑凡夫等の爲めに無量なる大慈大悲の甘露の雨露を注がせたまへらんことを祈る降つて今此の下圖に描寫せる「圖あり、畧す」一笠一杖の巡禮者は元と島根縣下雲州松江市のアヲリ共道湖畔に沿ひたる一小僻邑に生れたるもの少年の頃よりい／＼不運遊境の淵に沈み更らに十五六才の頃より一晩不具となりまた腦神經を患ひて殆んど身は婆娑世界のものにあらざりしそれがため甚だしき無常悲哀の日月を送ること幾年されども赤貧殆んど無一物の難進者

とこの眞善美の理想界「即ち佛陀の世界」はやがて其の處であらうと信じます私も數年已前迄は他人から迷信者といひて嘲罵されるを忽ち感情が左右轉して煩悶苦痛を世しましたが今ては難有や水火も奪ふべからざる泰山不動の「信仰」を求めました先生の「信仰問題」は私が去る日大隈國福山港の西念寺へと參つた時に寺僧さんが持ち居られました一寸貸して下さいと頼んで一夜拜讀しましたがあまりに難有くして床に就くことが出来ず讀書は好きなれども腦病がありましてドモ叶はず遂に半分ばかり讀みて後半分は翌朝讀みました就中「獨京柏林に於ける釋尊降誕祭」等の御記事何んともかとも云ふに云はれぬ感ずが起りましたア、先生にはかく天涯萬里の遠國にまでも御旅行あらせられて親しく歐米の宗教事情を御視察遊ばされ其の間無量の御辛酸を嘗めたまひて無事安全日本へ御歸りなされたる絶大なる御壯舉、實に感ず銘々涙にむせびますサア、先生の御心中何にたとへられぬ無限の光明に輝がせたまへることでありませう誠に羨望の至りに堪へませぬ

私は中々風俗は乞食なれども内心には四六時中不斷慕ふて止まざるは「眞理」の外ありませぬ此の「眞理」の光りが見んが爲めに巡禮國中にも到る處で色々なる宗教味を帯びたる書物雜誌類を入から借りて讀みました彼の有名なる「年有半」や「天人論」も讀みましたけれども何れも私が心靈に充分の安慰と満足を得ることはなかつたので然るに先日先生の「信仰問題」を拜讀しましてより以來更に幾層の信仰力を養長しましたア、ナンポー學問や技藝が出来ても信仰のなきものは駄目でありませぬ私がこれ迄數年間諸國を巡禮し無錢旅行して見ますと日本人には皆なそれ／＼「信仰」の心はないのではありませんが殆んど皆黄金を信仰し婦人を信仰し美衣美食美屋を信仰し貪慾を信仰する我利我々主義の聖大多數滔々たる天下皆これでありませぬ口には忠君を唱へ愛國を云ふし國家主義の「世界主義」だの云ふて居るけれども其の者は唯止む事なき故よりしてかく云ふので實際は皆な(人はドモよい自分さへよければ夫れで宜しい)的の無慈悲者無宗教者無信仰者が多いので誠にドモ未世五濁の今日に困つた世の中になりましたア、彌勒大菩薩様は五十六億七千萬年そんな途方もない未來世紀に御出現されてはたまらぬ早く／＼明治四十年前後には是非御出現あらせられて大々の大説法を御願ひ申します巡禮者は特に御願ひ申しますまた私が巡禮の旅行中到處にて中學生已上の者及びヤ、教育ある人に向つて宗教の事を尋ねますと彼等は皆な無宗教を譽れ

夜

甲

之

八重雲ちわき天に立つ
山の麓ゆ流來て
岩に打ちつゝ行く水の
千度思へどかへらざる
いにしへゆ今、雨嵐
間なくひまなく散る花の
暮るゝ夕に森の奥。
細き灯、茫然と
立ちつくす我が目に入れば、
行くともなしに我我を
灯の下に居ると見し。

雜然と筆硯など
載せたる間、肱つきて
語る机のか黒きに、
目に入る花は、さゝやかなの
一輪ざしに紅二輪
白一輪の三つの花。
艶やかな葉に映りよき
花びらと葉と、めぐはしき
玉花椿。花びらと

思へば今はよろこばし。

白雲めぐる秩父山、
羽村の里の水清き
多摩の河邊の紅葉を、
壁にかゝけしみ佛の
み姿の前かざしつゝ、
秋の夜半いにしへの
大き聖の行ひを
歌ひし文を、吾爲めに
誦したまひし其聲の
胸にひびきし我胸の
ひびきを今も覺ゆるよ。

四隣寂たる春の夜半、
風止んでともし明に、
香煙くゆり哀々たる
和讃一遍又二遍、
くりかへし終へ出て來る
友と向ひて、人の世の
親のなさけを語らひて
灯に向けば、我れが目に
涙ぞこもる。人の世は
悲しき故に、み佛の
み國しみじみしたはしき。

葉と傾かひい向ひて
語る机の上にある。

雨を催し吹く風の
障子ゆするに友と我
しばし語らひ止むれば
遠く聞ゆる市の音、
庭の常磐木吹く風に
まがひて聞ゆ。風の音に
心動きて壁の書を
見ればしぬばゆ、しめやかに
去にし悲しき秋の夜を
佛の慈悲を語りたる
人の姿の目に立ちて。

行手の空の雲の果、
山なき野へのま夜中を、
先行く人にならひつゝ、
轍のあとをたよりつゝ、
相いましめて行きしかど、
悲しかりしよ。黒雲は
空を覆へど、雲の間ゆ
い照る光に行く今の
我を思へば、古は
悲しかりしよ。いにしへを

春の霞の百二十里
山川遠くへぞつれど、
近江のうみの天つ水
絶えぬが如く、我心
絶えずしぬべば、氷解け
流るゝ水のゆるやかに
再び眼紅の
椿の花にとゞまりぬ。
我を忘れて目を閉づる
時に目の前、佛國の
莊嚴を見るありありと。

さやるくまなく押して照る
光に我は驚きて、
讚嘆の歌うたはんと
するに言の葉絶えはて、
氷に身をば切らるゝと
思ふすなはち、遙かなる
空中の聲に驚きて
見れば忽ち吾前に、
忽ち空に、み佛の
光くまなきみ姿を
をがめば心しづまりぬ。

時報

降誕會

陽春四月櫻花の時節となりぬ。而して今月は吾人有縁の聖者の降誕ましませし時なり。一日は親鸞聖人の誕生日なり。繪詞傳に曰く吉光女夢の中に西方より金色の光明輝き來り身を回ること三度にして口中に入ること箭の如し、驚きて西の方を見玉へばひとりの菩薩ましく一尺斗りの五葉の松一本を持ち、之を授けて宣はく、吾はこれ如意輪なり、汝奇異の兒を生ぜん、必ずこれをもて名とせよと承安三年四月一日誕生し玉ふ十八公鷹と名け奉る。七日は法然聖人の誕生日なり。黒谷上人傳に曰く、母葵氏夢に剃刀を呑むとみて懷妊し玉ひ、長承二年四月七日午の正中に奏氏惱むことなくして男子を生む、時にあたりて紫雲翳き館のうち、家の西に、もと二又にして末繁く高さ椽の木なり、白幡二流飛ひ來りて其梢にか、れり、鈴鐸天に響き、文彩日に輝く、七日を経て天に昇りぬ、見聞の輩奇異の思をなさずといふことなし。而して八日は實に我が大聖釋尊の降誕ましませし日なり。ジャータカに曰く、摩耶夫人夢に四天王に伴はれて雪山の上に遊び、阿羅池に浴し、銀山に上り、金堂に入りしが、白象金山より下り來りて白蓮華を捧げ体りて、夫人の床下に三禮して右脇より入る、此時諸の奇瑞あらはれ、地震ひ、花開き盲者は眼を開き、聾者は聲を聞き、聾者は語り、跛は行き、囚人は釋

され、地獄の火は滅し、餓鬼は食し、猛獸は柔順に、病者は癒は、人は親切に相語り、馬は嘶き、象はやさしく歩み、音樂は自から奏せられ、天明らかに、風靜かに、雨降り、水畔かに、鳥高く飛はず、河流を停め、海水新に世界到る所蓮華紛々として降る、菩薩胎中にある恰も器中油を盛るが如し、在胎十月、嵐毘尼園中、花實鬱々として一簇雲の如く、雜色の蜂、遊禽の群、婉轉として花間枝上に飛翔せるの時、夫人之に遊び一沙維樹の枝に攀ちんとし玉ひし時、人繞らずに幔幕を以てし、佛陀は正しく降誕ましくけり、實に四月八日也。其他必ず多くの聖賢の生れ玉ひし日も多からむ、各有縁の聖者の降誕を心より祝し奉るべきなり。眞宗大學にては一日に其講堂に演說會を催ふし、淨土宗にても七日に其催あるべく、八日には大日本佛教青年會の第十四回釋尊降誕會を兩國回向院に行はる、筈なり。嗚呼我等は心より深く大聖權化の誕生を慕ひ、喜び、祝ひ奉るものなり。

卒業期

我等小供の時正月を待ちわびしが如く、學生の正月は實に四月なり。學校に在るの人は前學年を終へて、新らしき學年に入る、春季休業の樂は、小供の時の松の内よりも樂しさ也。隅田に舟を泛へ、小金井に櫻を觀る、されど此間にも、慈光の遙かに照し玉ひて、養育の恩深きを喜びたまふべし。殊に學校卒業の人は多年の修業を終りて、學界の月桂冠を得る、實にたのもしきの極みなり。されど中學校の終りは高等學校に入るの初、學校の卒業は社會の始業なり。求道會を催めし

より著しき現象は、從來大學高等學校の系統に佛教を信するもの多かりし如く、又高等師範の系統にいたく求道の氣運の起りたることなり。男子の高等師範校にては嘗て毎週一回釋尊の傳を講じ、終りて後嘆異鈔を講じ、其態度頗る眞摯、七八十人の聽講者は絶へざりしが、今や此等の人々は各任地につきて教鞭をとり玉ふに至りぬ。みな心の底に御佛の慈悲を漾へて、御佛の御子の手を執り玉へかし。又女子高等師範校の人々は毎會求道學舎の日曜講話に出席し玉ひて、欠席あることなし、殊に第三日曜日には女子の信仰談話會ありて、眞面目に其胸臆を披きて、御佛の慈悲を味ひ、其進境頗る著しく、益々進みて益々恭しく、愈々深くして愈々神聖の域に至りぬ。このたび卒業の人々求道學舎の庭前にて紀念の爲め撮影して各相顧ちて任地に赴き玉ひぬ。あはれ各有縁の土地につきて清らかなる御佛の心を以て世の濁りを滌き玉へかし。今後も第三日曜日の講話後(從來は午後たりしが)に女子の談話會を開き、第四の日曜日の講話後には一般の談話會を開きて、さす道を求め、年々後を繼ぎて、長へに此學生の正月を壽させむかな。

求道學舎の昨今

無文律の下に自から統一あり、自策自勵して自から信仰の海に相會したるが如き趣あるは學舎昨今の有様なり。食卓を圍みて談笑し、夜會を開きて信仰を談ず、爐畔に疑義を質し燈下に中心を披歷す、拂曉聾鈴一振して佛間に集りて嘆異鈔を輪讀し、花下器械躰操をなす。而して最も著しきは佛間に

時々磬の音響きて、朗々として聖教を拜讀する聲することなり。百目木君子を擧げて呱呱の聲愛すべく、軒端の鶯の初音亦愛すべし。而して予は本月六日歸省して亡父の一週忌を營み、二十日母を奉して歸京せり。春雨暖かにして庭前の櫻樹花を催す、梢を通して學舎の窓々、啾啾の聲の洩れ出づるいと嬉し(一日近角記、歸省の爲二三日後れし罪を謝し奉る)

▲求道學舎日曜講話題

- 二月二十六日 不可思議の力 近角常觀
- 信仰談話會(講話後)
- 三月五日 無染清淨心 近角常觀
- 三月十九日 鍊倉時代の話 佐々木月樵
- 女子信仰談話會
- 三月廿六日 海の譬喩 近角常觀
- 信仰談話會
- ▲第二求道會講話題
- 三月四日 歡喜愛樂 近角常觀
- 信仰談話會
- 三月廿五日 智慧海 近角常觀
- 三月廿五日 ▲第三求道會講話題
- 宗教の社會的活力 近角常觀
- 成功は確信より來る 同 上

上野の半日

○上野の花は未だ咲かぬ、されど昨日は神武天皇祭で半日の閑を得たれば久しぶりにて上野を散歩して二三ヶ所一寸のぞき見をした、埋草として一寸思ひつきたまゝを書きてみよふ。

○美術學校では恤兵の爲めに開かれた展覽會があつた、色々あつたが、イッ此所へ來ても神聖にして言ふべからざる靈感を以て、うたるゝは参考室にある狩野芳厓の觀世音の圖である、第一金の色も又繪具も頗るれちつさて殊に光明赫灼たる世界と、紫の澄みきつた空の色とが、何處といふ境なくして溶け込みて自から圖の下の角にある嵯峨たる山頂を以てあらはされたる此世界に續ける様子は得も言はれぬ味がある、又觀世音の足下にある雲の形が如何にも妙へたるものにて御佛を運び奉ると言はんか、御佛に従ひ奉ると云はんか、トニカク一種の運動があらはされてある、觀世音の下に合掌して仰きて難有相に口を開ける嬰兒の様子は如何にも如來の御子の罪なき趣があらはれてある、勿論菩薩の慈眼視衆生の御趣は圖の最も生ける點にして拙き言葉を以て言ひ顯はすことが出来ぬ。

○博物館へ入つて見た、いつも同様のものであるが、此頃は新たに乃伊木が來たといふので澤山の見物人である、是は何某の子、誰であるといふて名前がかいてあつたので可笑かつた、聖德太子の御物を拜見した、社説にも書きて置く様に太子の御徳を追慕するほど昔を忍ぶ心がする、御衣、珠數、拂

赤松大勵君奉天附近の會
戰にて戰死仕候間、此段辱
知諸君に告ぐ。

四月一日
友人 波來谷純意
佐々木月樵

近角常觀著

信仰の餘瀝

並製賣切

◎上製特別減價拾五錢

郵税二錢(郵券代用一割増)

發行所

東京本郷區森川町一番地

求道發行所

子、笏、鐵鉢など様々のものがある、水晶の恰も卦木の様な形をした御幼年の時の玩具があつた、イカにもなつかしく思はれた、膳の妃などの作られたと傳ふる繡製の佛像がある、聖德太子はタシカに今後大に味ひ奉るべき御方である、宗教信念の熱せざる時代には分るべき人でない、親鸞聖人が理想として渴仰されたので、益々太子の深く尊むべきことが分かつた。

○又、専修寺の親鸞聖人傳繪が出てあるそうである、昨年信州鹽崎の康樂寺で其寺の寶物たる法然聖人の御灰を塗り奉りたる御像と御傳繪とを拜見した、御像はイカニモ柔和温容拜し奉りて感涙に堪へなだか、御傳繪の終りに原本奥書云云とあるので少からず落膽をした、専修寺のはイカにも飾り氣なく、筆力猷勁タシカニ覺師の眞本に違あるまひ、タシカ國寶になつた筈である。

○太平洋畫會で住友家より出品したるルーテル及其徒弟と題するローランヌの大作がある、圖の場所はワルトブルグ城中のチャヘルの最下の室を描きたるものらしい、ルーテルの氣骨ある趣にてマタイ傳の初を見せて居る風姿、徒弟の感激して一整に手を出した有様、中央の燭光の言ふべからざる熱と光とを運びて、薄暗き室の間に森嚴の氣の満ちたる様子など、低徊去る能はざらしめた。(旭)

常盤文學士纂

佛陀之聖訓

訂正再版

◎上製一部 金卅五錢
◎並製 金廿三錢
郵税各 四錢

◎佛教の大要を知るに足る。

◎講話教誨の講本に適す。

◎修養の箴たり、家庭の規たり。

好評噴々、發行の月、初版を賣り盡して、市上一本をも止めざる一ヶ月餘、今や再版に次ぐに第三版を以てす。之に對すれば佛陀の温容彷彿として眼前にあるか如く、徳訓諄々として心絃に響く。佛誕の今月特に大方の体讀味解を乞ふ。

發行所

東京市小石川區
白山前町三十一

無我山房

取次所

東京市本郷區
森川町一番地

求道發行所

前號目次

求道

◎愚禿悲嘆述懷

◎修養小訓

自信は不動の地盤也

苦き經驗

修養の機會

絕對性の發揮

佛陀の命は力也

不可思議力

◎信仰的理想郷なる吾が『羽村』

講話

◎金剛の信

實驗

近角 常觀

◎懺悔

無漏田 貢

◎信仰の經過を人に告ぐるの書

佐々木哲郎

◎五臺山探勝記

靈蹟 嘆咏

菊地 秀言

◎喜

友に

荒川 甲之

紹介

◎武家時代の女學叢書◎佛陀論◎起信哲學◎
日の洞雷の恩◎うかれ笛

時報

◎軍艦日進戦死者追悼會◎第三求道會の實況

◎第一高等學校徳風會夜會◎信仰熱の氣運

◎求道學會日曜講話◎第二求道會等